

いつか絵本になれるかな



ドクトルJ O J O
あばうとbook

著者 東條 恵

はじめに

- 最近、仕事関連で、発達障がいと呼ばれる状態に関する本を、いくつか作成しました。一冊が10万字を超える本です。
- そして、長々とした冗長な文章しか書けない自分に、半ば嫌気が差していました。
- そんな中、短い文章と絵で構成される絵本を、強く意識するようになりました。
- 絵本といえば、子どもの頃に毎月幼稚園から配布された絵本があった様な記憶があります。きっとそうだったのでしょう。また、自分の子育てでは、「のんたん」シリーズにお世話になったことを思い出します。何回も何冊も、子どもの前で読みました。
- 岩崎ちひろ美術館へ昔に行ったことを思い出し、再度行ってみたいり・・・そして絵本の原画展をみたいり・・・。そんな中、「百万回生きた猫」を読んで、絵本が人を感動させるものであることを、初めて知りました。
- 「何かわからねども、人とつながりあいたい。伝えたい」。そんな思いがあふれました。
- 幼少期以降、絵が好きでした。もちろん水彩画などの話しです。大学時代、油絵を自己流で描きましました。でも、一時で終わりました。そして長い年月が経ち、現在は鉛筆で下絵を描き、それをデジカメで写真に撮り、その後パソコン上でお絵かきソフトを使って・・・または直接パソコン上で描くという安易な方法で、絵を楽しんでいます。そして、文章・お話つき絵の作成を楽しむようになりました。「これもありかな」との思いです。
- そして、「いつか絵本になれるかな」との身の丈知らずな大胆な思いを秘めて、今回これまで書き溜めたものを、まとめてみました。
- 文章もですが、絵は見てのとおりの拙いものです。でも、これが今の私にできる精一杯に近いものです。(一冊の絵は、息子に下絵を依頼しました)
- 作成順に並べてあります。楽しんでいただければ、幸いです。

リスト

- ① 海はうれしかった
- ② ひゅんひゅんぼうや
- ③ しろくろとちょっぴりいろ
- ④ お～さむ あったか～
- ⑤ 真夏の昼の出来事
- ⑥ いやんばかん鬼
- ⑦ おならぷー
- ⑧ コーギーの自転車こぎ
- ⑨ おこりんぼ鬼さんと喜んでばかり鬼さん
- ⑩ ゆきのなかであそんじゃお
- ⑪ 電信柱の木の下で
- ⑫ 僕たち マルチアンテナ人間

きっと大人の絵本

海はうれしかった

ドクトルJOJO

あばうとBOOK



うみは まっていました
人が きてくれる はるを

うみは まっていました
「わ～あ すっご～く大き～いんだ～」
「ちきゅうって ま～あるい」

そう いってもらえる なつを

ぼんやり したいな
がんばり たいな
ゆっくり したいな
おさかな ほしいな

そんなとき
ひとは きてくれます

「ひとのために なっているんだ」
うみは うれしかった のです

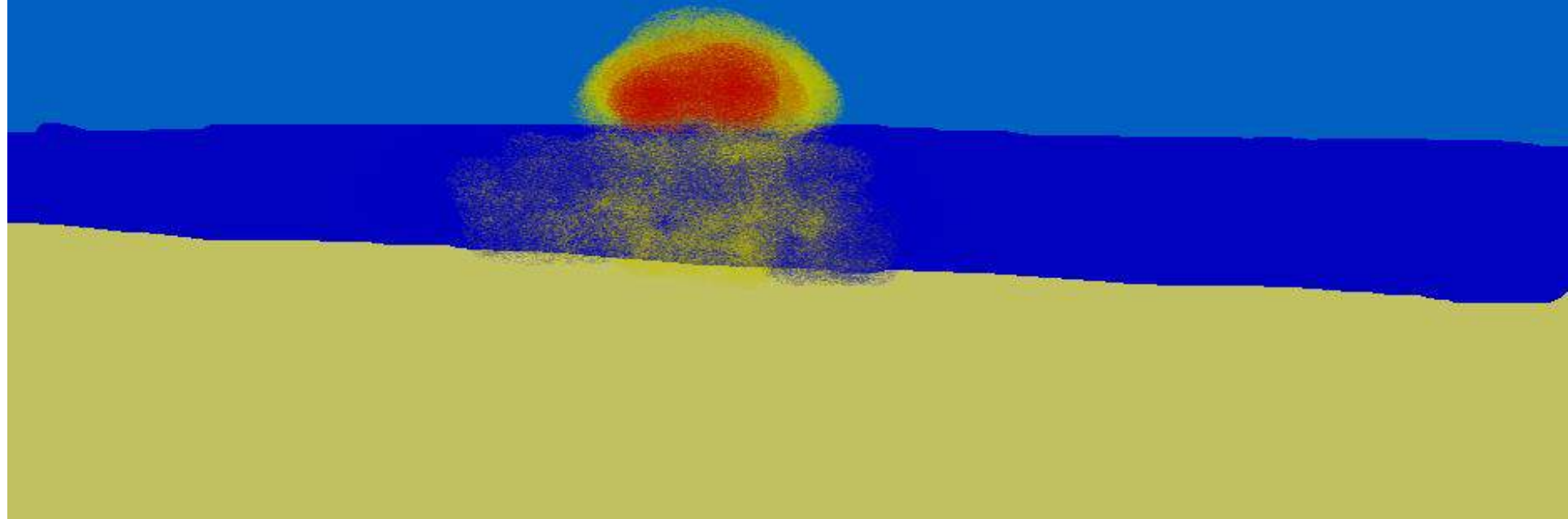
ふゆ ごみで いっぱいになっても
うみは しあわせ でした

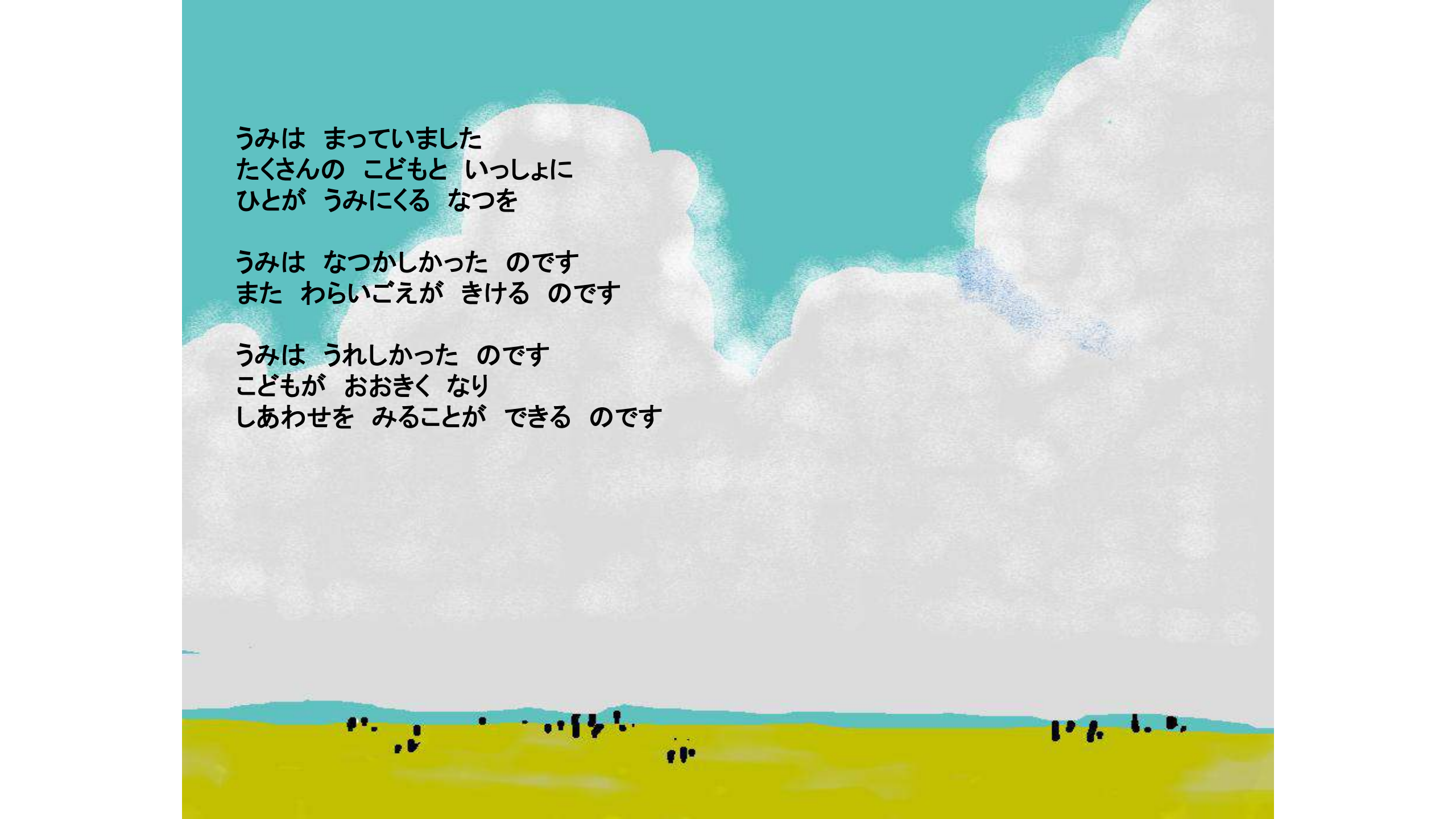
あさ や ゆうがた うみを おとずれ
ひとは かえって いました

なみの おとを きき すいへいせんを みつめ
ひとは かえって いました

しずむ たいようを うけいれる うみを みつめ
ひとは かえって いました

おさかなや こんぶなど
うみの さちを もって
ひとは かえって いました





うみは まっていました
たくさんの こどもと いっしょに
ひとが うみにくる なつを

うみは なつかしかった のです
また わらいごえが きける のです

うみは うれしかった のです
こどもが おおきく なり
しあわせを みるこゝろが できる のです



うみは うれしかった のです

「まいとし きてくれる
あいに きてくれる
わすれられて いない」

たくさんの あしあとを のこし
なつは さって いました

そして うみは
ちょっと さみしく…なりました
きてくれた ひとの かずだけ
さみしさを かんじた のです


うみは つらく なりました

おとずれた ひとの かずだけ
さみしさが たくわえられ..
よろこびが さり..
ぽっかりと むねに
おへやが できた のでした

でも うみは していました
あきの そらが
うみの うえに ひろがり
うみを つつみこみ
うみを いやして くれるのです

でも うみは していました
こころに ちから や ゆうきが もどり
ちからが でてくる
ふゆを むかえられる ことを

そして あきが きました



うみは まって いました
こころに ちからが わきあがって くるのを
ただ じっと まって いました

でも いつもと ちがった のです
ちからが わいてこない のです

まっても
まっても
こころに ちからが
もどって きませんでした

うみは なきたく になりました

「どうして なんだろう…」

「ひとが よろこび わたしも いっしょに
うれしさを かんじた のに」

「つらく なくても

あきに よくなって きたのに…」

「なのに…もどらない」

「あきの そらに つつまれると

ゆうき と ちからが みなぎる のに…」

「はるの あたたかさに つつまれると

こころに やさしさが わいて くるのに…」

「なのに…もどらない」

うみは わけが わかりませんでした



うみは まちました

なんにち も
なんねん も
なんじゅうねん も

まつしか なかった のです

じっとした ころの なか

うみは まちました

なにかを しんじて

ある ふゆのひ
ひとりの せいねんが
うみの むこうから やってきました

そして
ゆき ふる なか
うみべで たきびを もやしはじめました

うみから うちよせられた
りゅうぼくを ひろいあつめては

なににちも なににちも
もやし つづけた のでした

うみを みつめながら
うみの むこうの ふるさとを おもい
もやし つづけた のでした



それは それは
ながい なが~い たきび でした
さむさをしのぐためには
たきびが ひつよう だったのです
からだを あたため
こころを あたため たくて
まいにち たきびを もやした のです

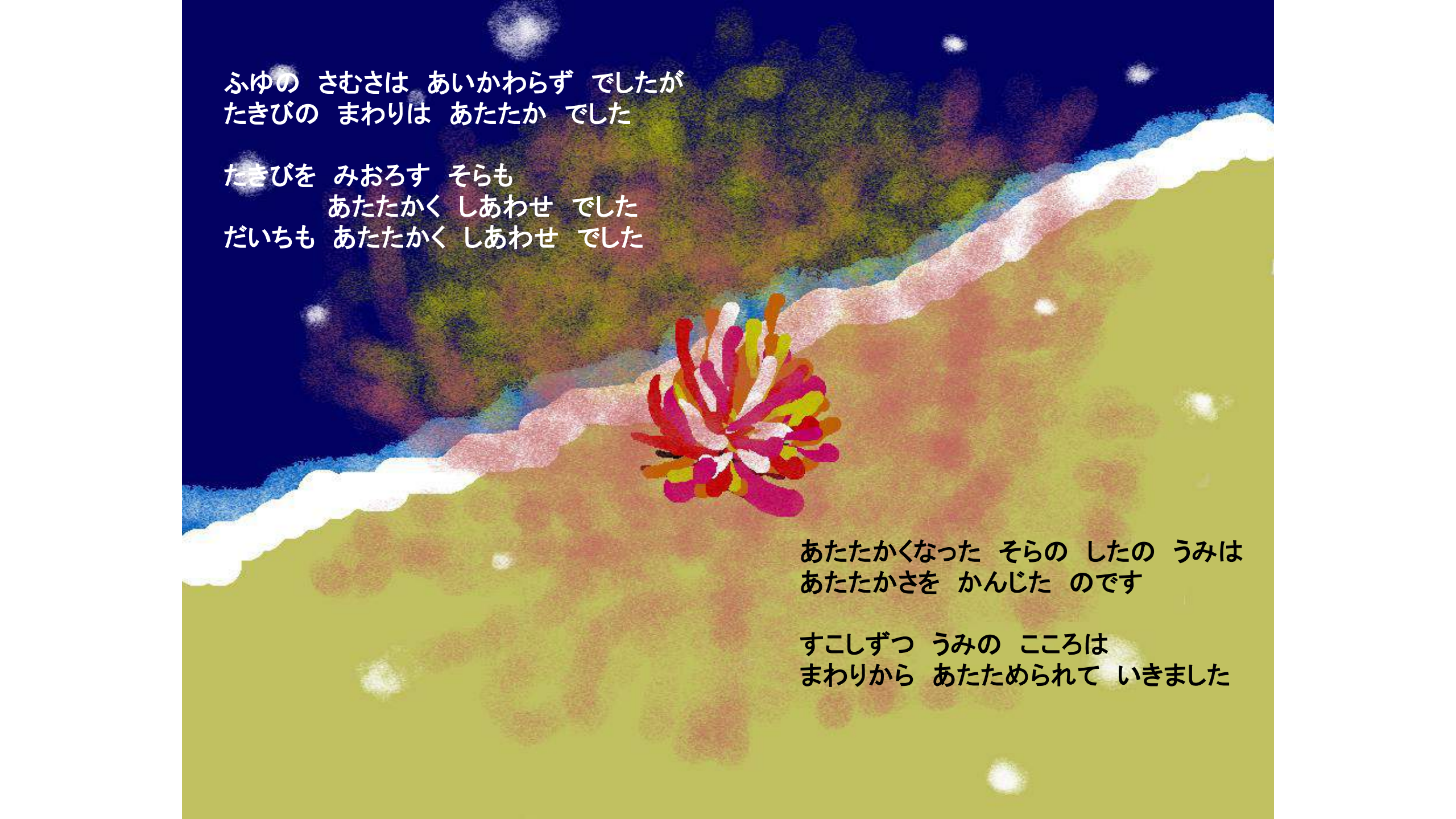
そして
なにが おこるか
だれも わかりませんでした

うみも わかりませんでした
そらも わかりませんでした
だいちも わかりませんでした

そして

せいねんも
わからなかった のです



A colorful, textured illustration of a night sky. The top half is dark blue with white stars. A rainbow with red, orange, yellow, green, and blue bands curves across the middle. Below the rainbow is a greenish-yellow field. In the center of the field is a large, multi-colored flower with petals in shades of red, pink, yellow, and white.

ふゆの さむさは あいかわらず でしたが
たきびの まわりは あたたか でした

たきびを みおろす そらも
あたたかく しあわせ でした
だいちも あたたかく しあわせ でした

あたたかくなった そらの したの うみは
あたたかさを かんじた のです

すこしずつ うみの こころは
まわりから あたためられて いました

あるひのこと

うみは ころろが ふるえた のです
ちからが みなぎって きた のです

はるの おとずれ ひとのおとずれ
にぎやかさを よろこび

そして

ひとの さりいく すがたを かなしみ
ふゆの さみしさに たえる

すべてを みなから
みまもる ちからが わいてきたのを しりました

あの ひととは どうなった のかな？

ああ おしごとを はじめたんですね

あの かぞくは どうなった のかな？

ああ こどもが ふたりも ふえたんですね

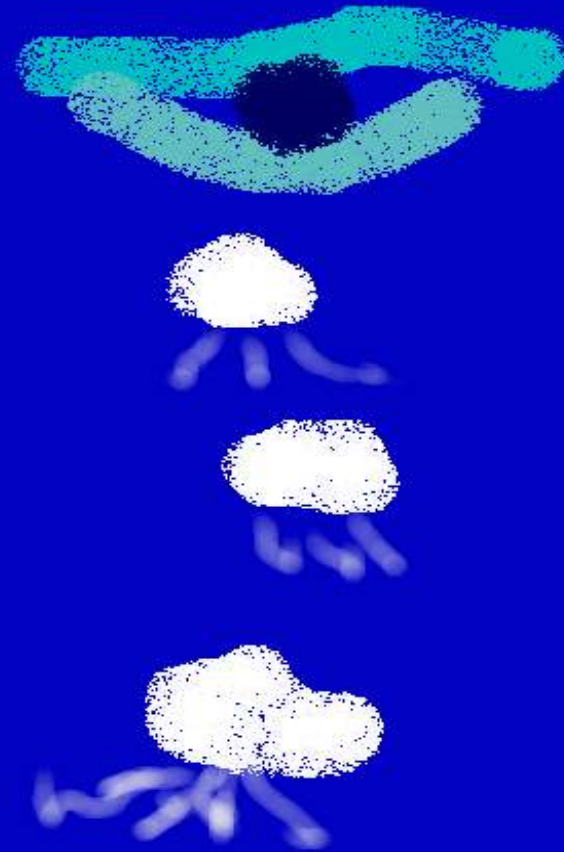
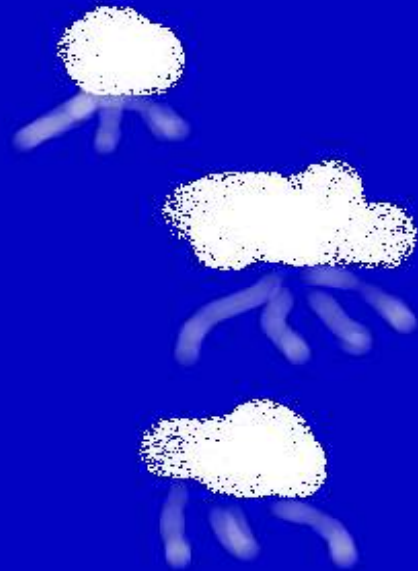
あの きになっていたひととは どうなった のかな？

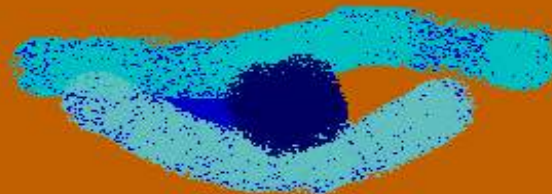
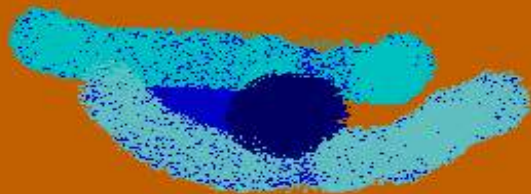
ああ てんごくに いって しまったんですね

うみは うれしかった のです
みまもる ちからが もどった のです

ひとが うまれ ひと は よりそい
そして いのちを つなぎながら
ひとは さっていく のです

そして みまもっている うみ





そう かんじられる

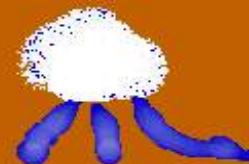


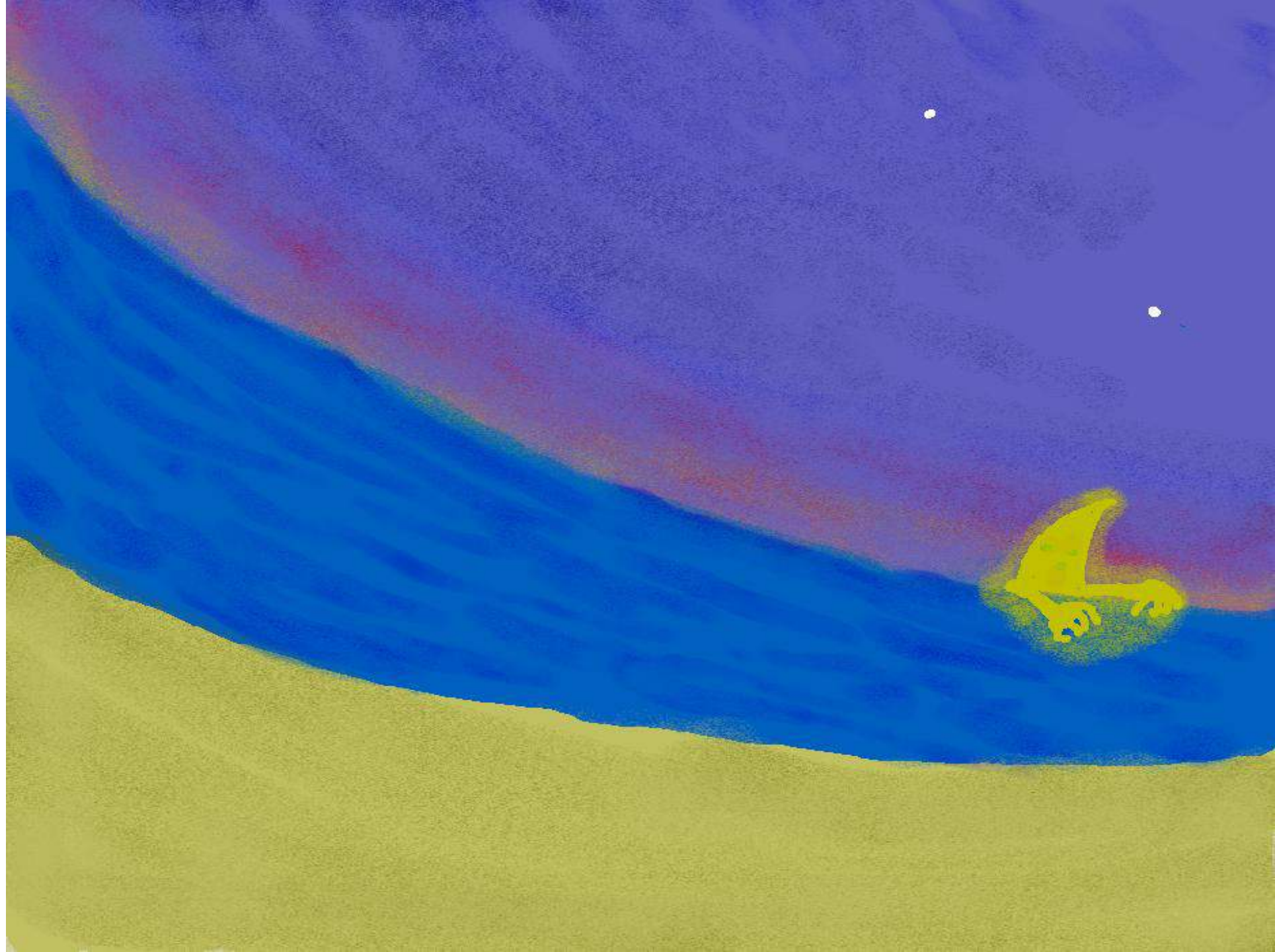
うみは
うれしくて うれしくて
なきました

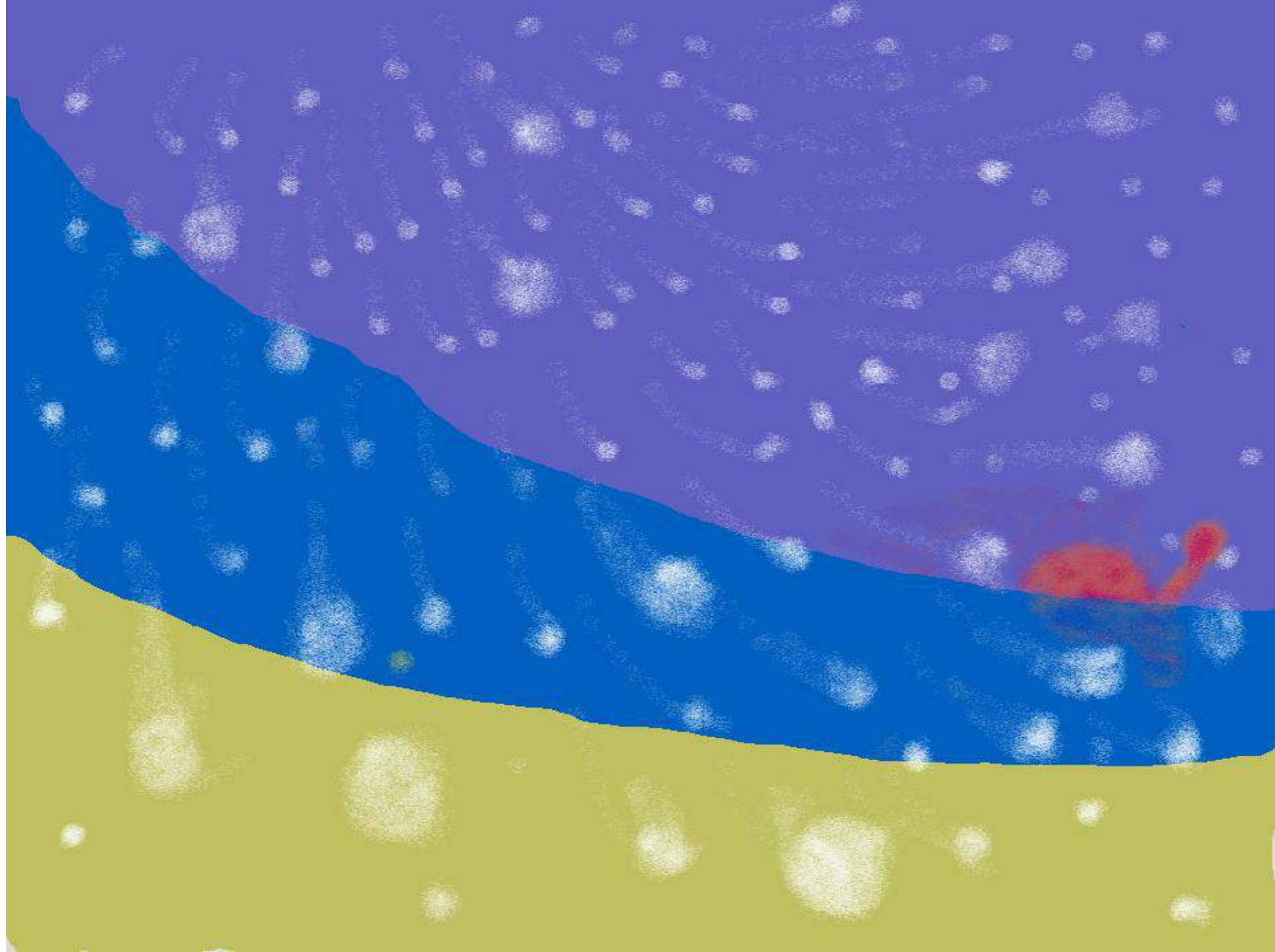


そして

うみは すこし
しょっぱく なりました



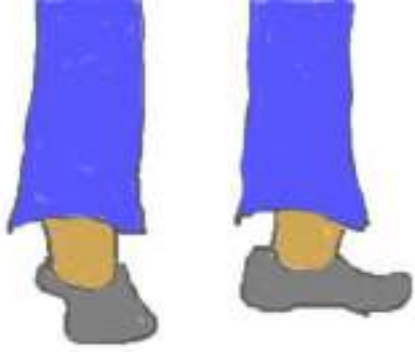




海はうれしかった

- 精神的に苦しかった時期、そして立ち直り期に作成したものです。
- 「人間を描くのはきっと難しい」と思ったので、少し寂しいですが、こんな感じに、風景主体にまとめました。

2004年作成



ひんがし ひんがし



文 ドクトルJOJO
絵 JOJOジュニア
あばうとbook

ひゅんひゅんぼうやです
げんきです



ひゅんひゅん とんでいきます
げんきです さむいそとでも
はしっていきます
けしきも とんでいきます

ひゅんひゅん とんでいきます
時間も とんでいきます
いっぱい したいことがあって
とんでいきます





ひゅんひゅん とんでいきます
3がっ 4がっ 5がっ

あっというまに なつやすみ



ひゅんひゅん とんでいきます
9がつ 10がつ 11がつ

そして さむいふゆ クリスマス



ひゅんひゅん とんでいきます

はる なつ あき ふゆ
1ねんは はやいです

1ねんが おわり
また 1ねんが やってくるのです

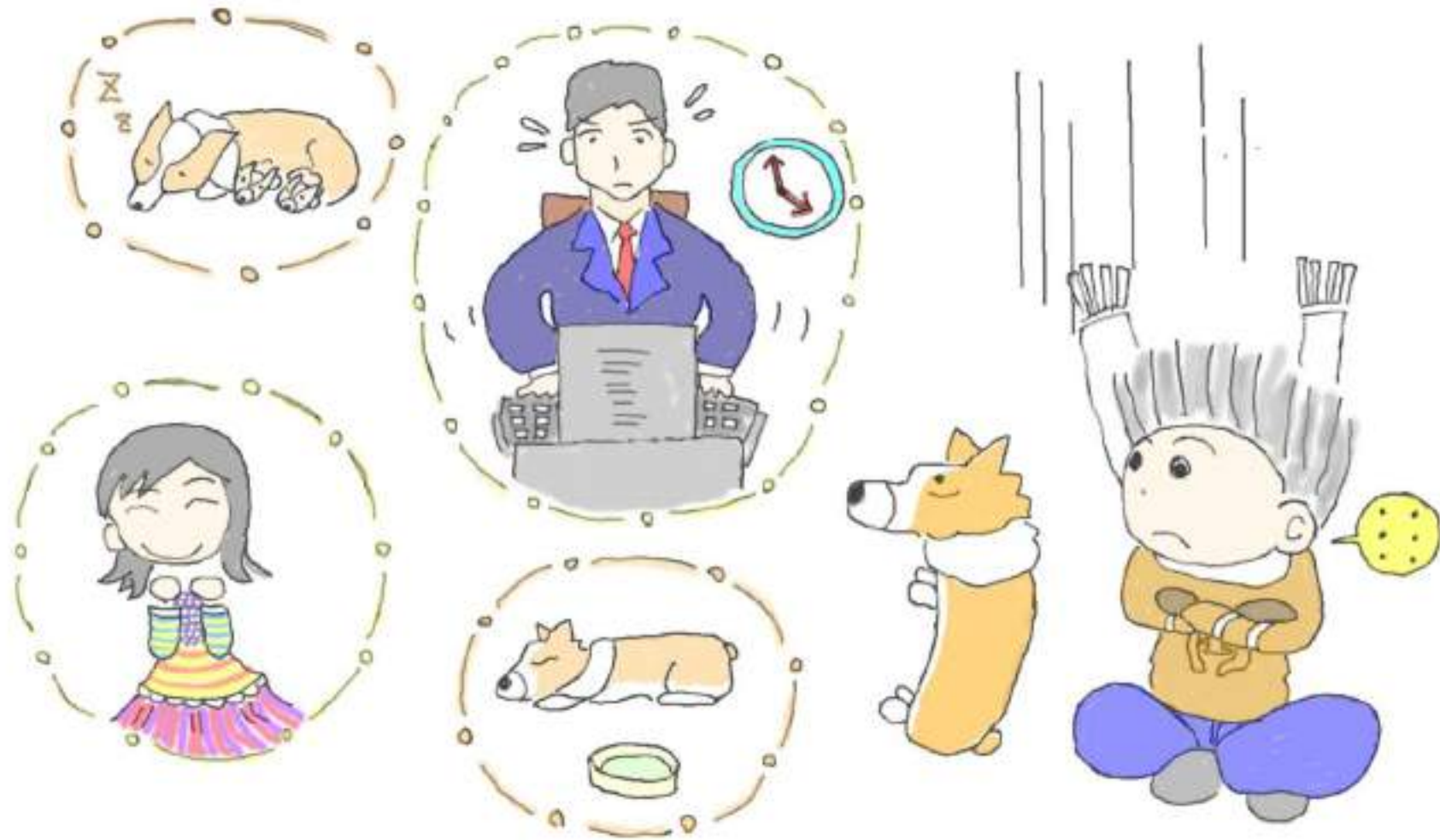


ひゅんひゅん とんでいきます
もうすこしで あけまして おめでとう
かるたの しょうひん みかんです



ひゅんひゅん とんでいます
ゆめいっぱいの子供です

おおきくなったら なんになる？



ひゅんひゅん じかんが すぎていきます
おおきくなって おしごとです
だいすきな ひと どこかにいます

ひゅんひゅん じかんが とんでいきます
はやく とんでいくこと すぎていくこと

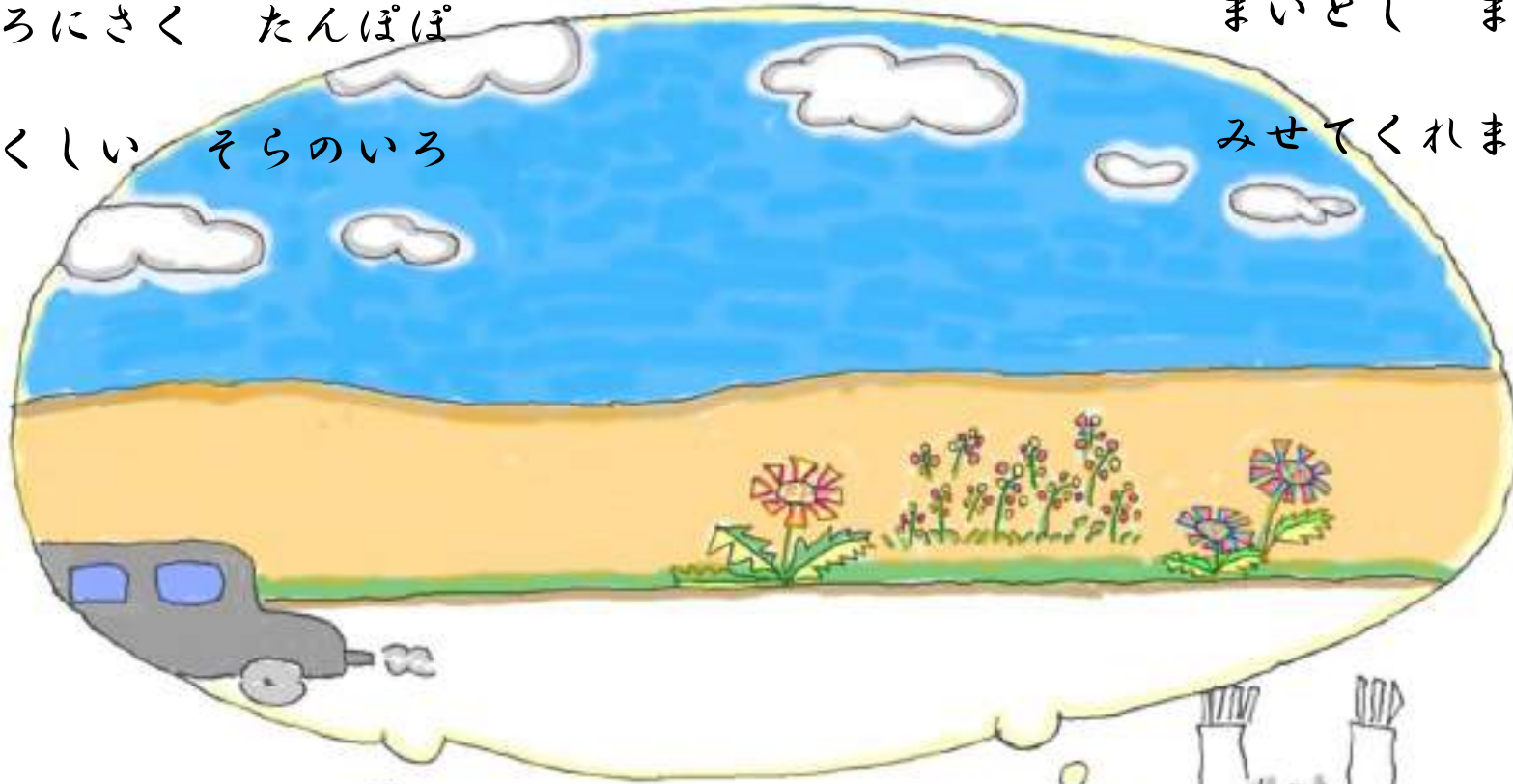
ほんとうに のぞみだったのかな？
よかったのかな？

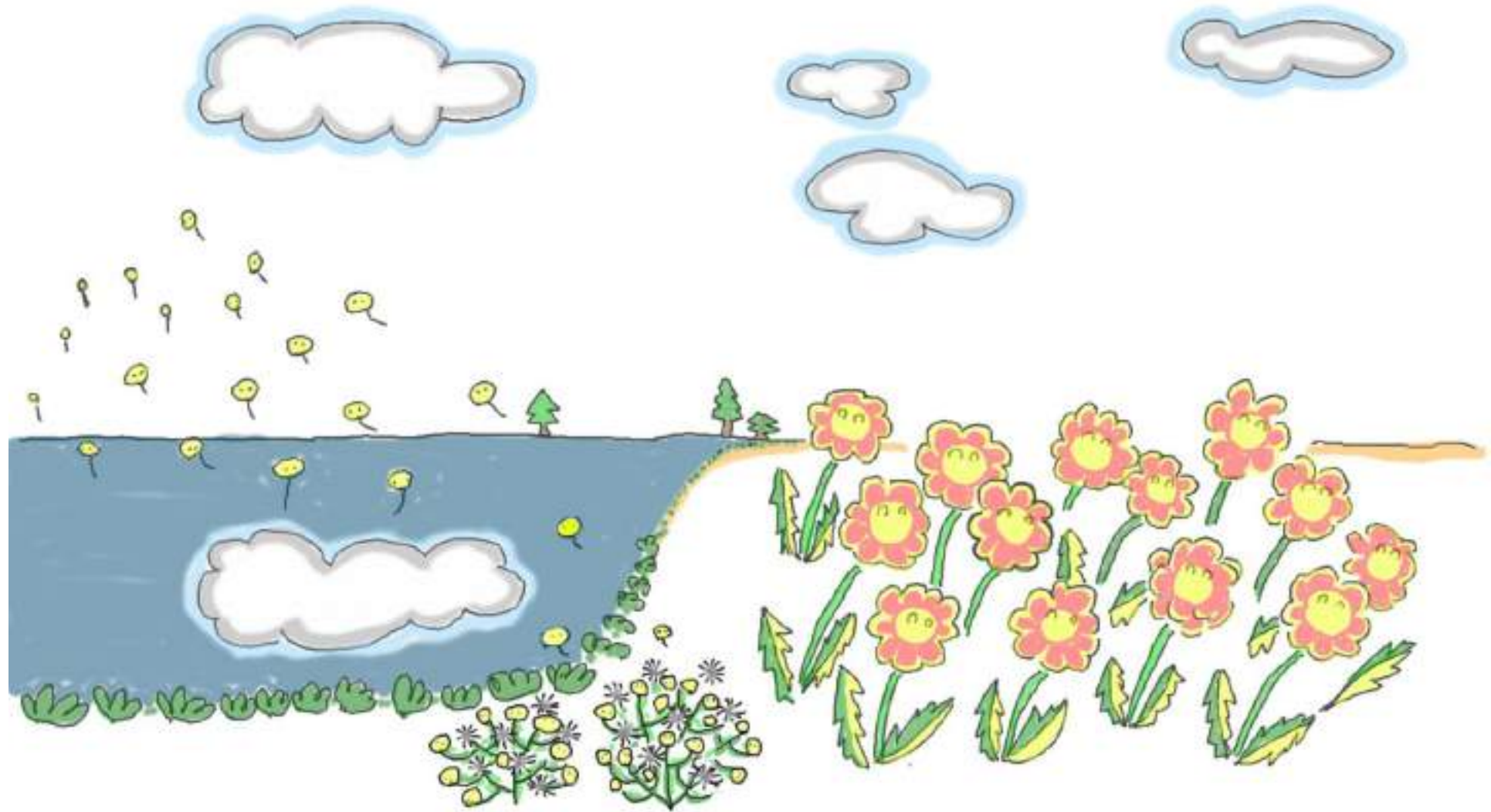
どうろにさく たんぽぽ

うつくしい そらのいろ

まいとし まいとし

みせてくれます





ひゅんひゅんぼうやは
きづかなかったのです

はなが さいていたなんて
そらがこんなにきれいだなんて
ちっとも きづかなかったのです



ひゅんひゅんぼうやは
ないています

だって しらなかつたのですから

木は おいしげり
いろがかわり はがおち
そして めがでる

でも もう わかりました

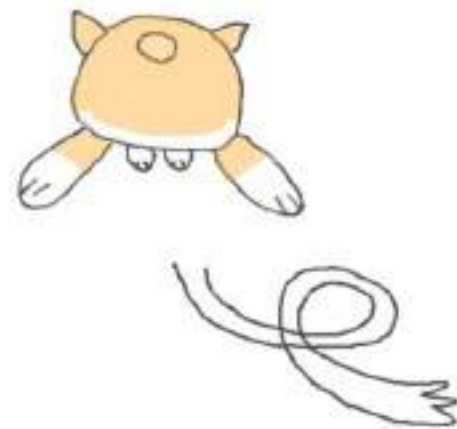
ひゅんひゅんぼうやは

きづいたのです





だから ひゅんひゅんぼうやは
ゆっくり とんでいきます
ゆっくり ゆっくり あるきます



ときどき つまずきながら

これで おしまいです

そして はじまりかな

ひゅんひゅんぼうや

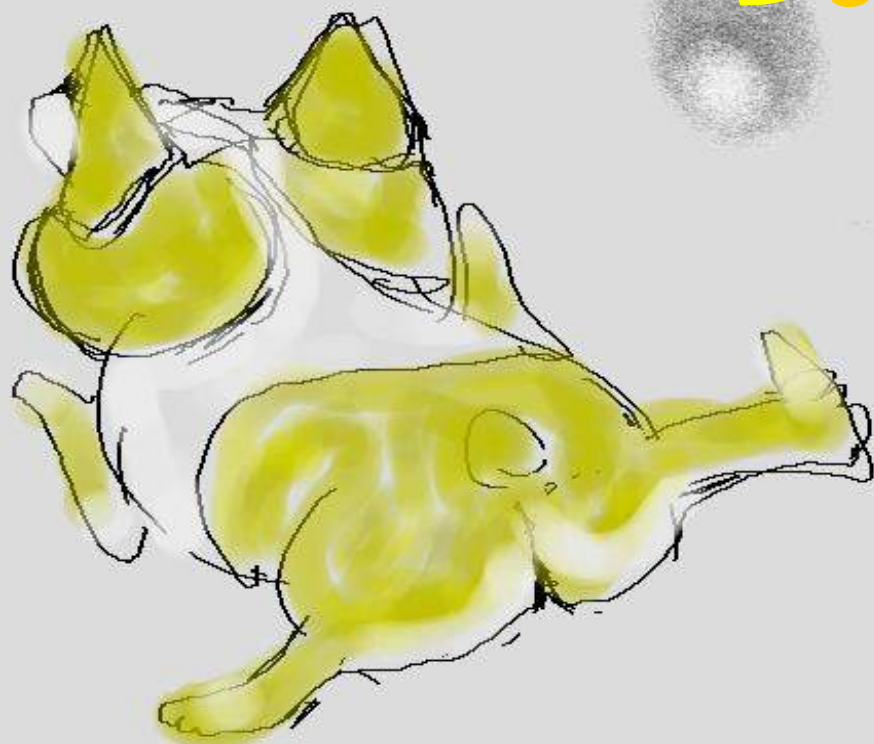
- 「これまでの、自分の人生の使い方を見直そう」と思っていた時期のものでした。
- 人や動物の顔の絵はとても描けないと思っていたので、息子にお願いしたのです。
- 子どもたちは絵を描くのがうまいものですね。
- 息子が描いてくれた線画に、私が色を付けてみたのですが、結構それなりになってくれたと、感じたのです。「何かいけそう」と思ったのです。

2005年作成



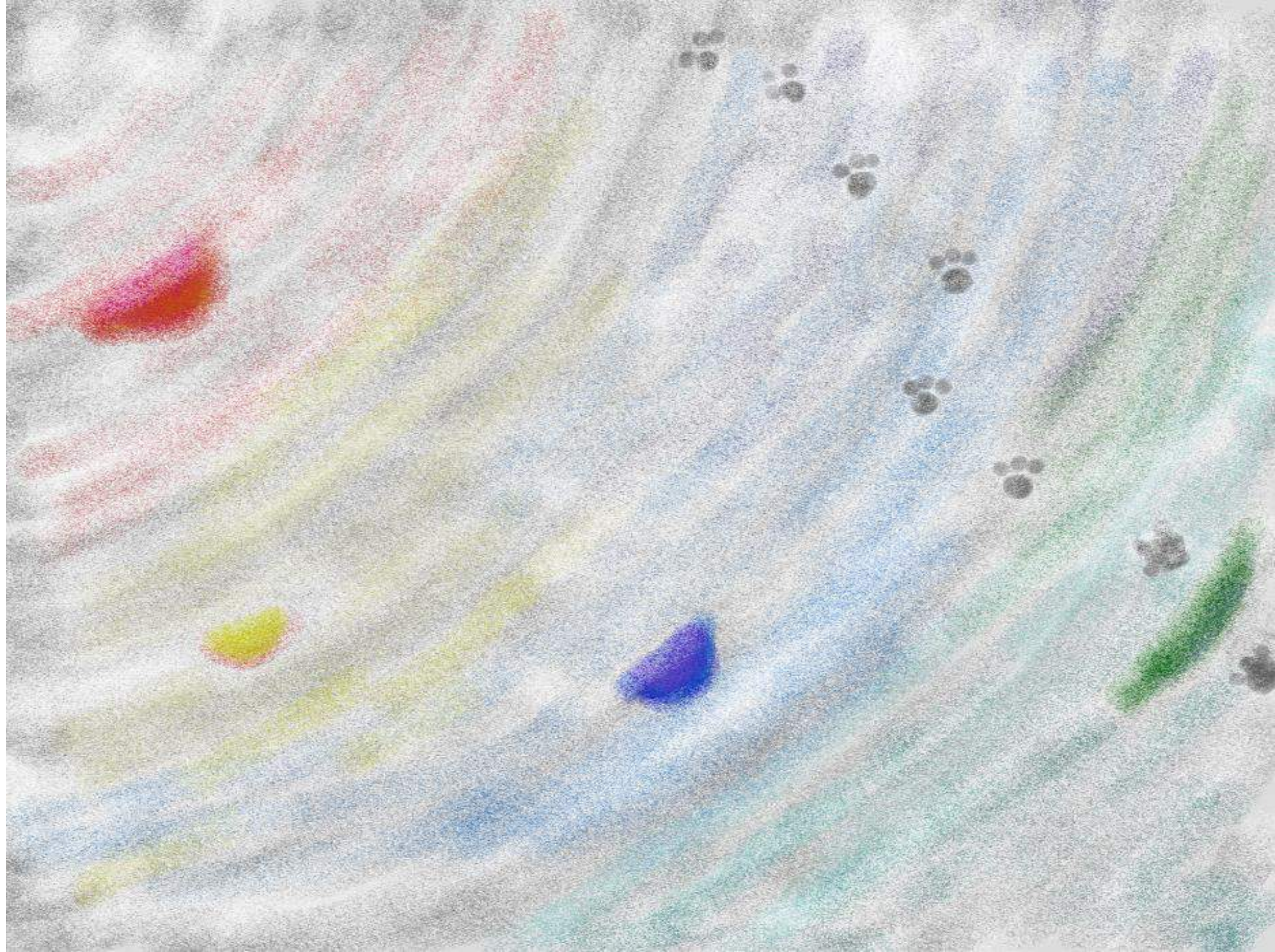
しろくろ
と

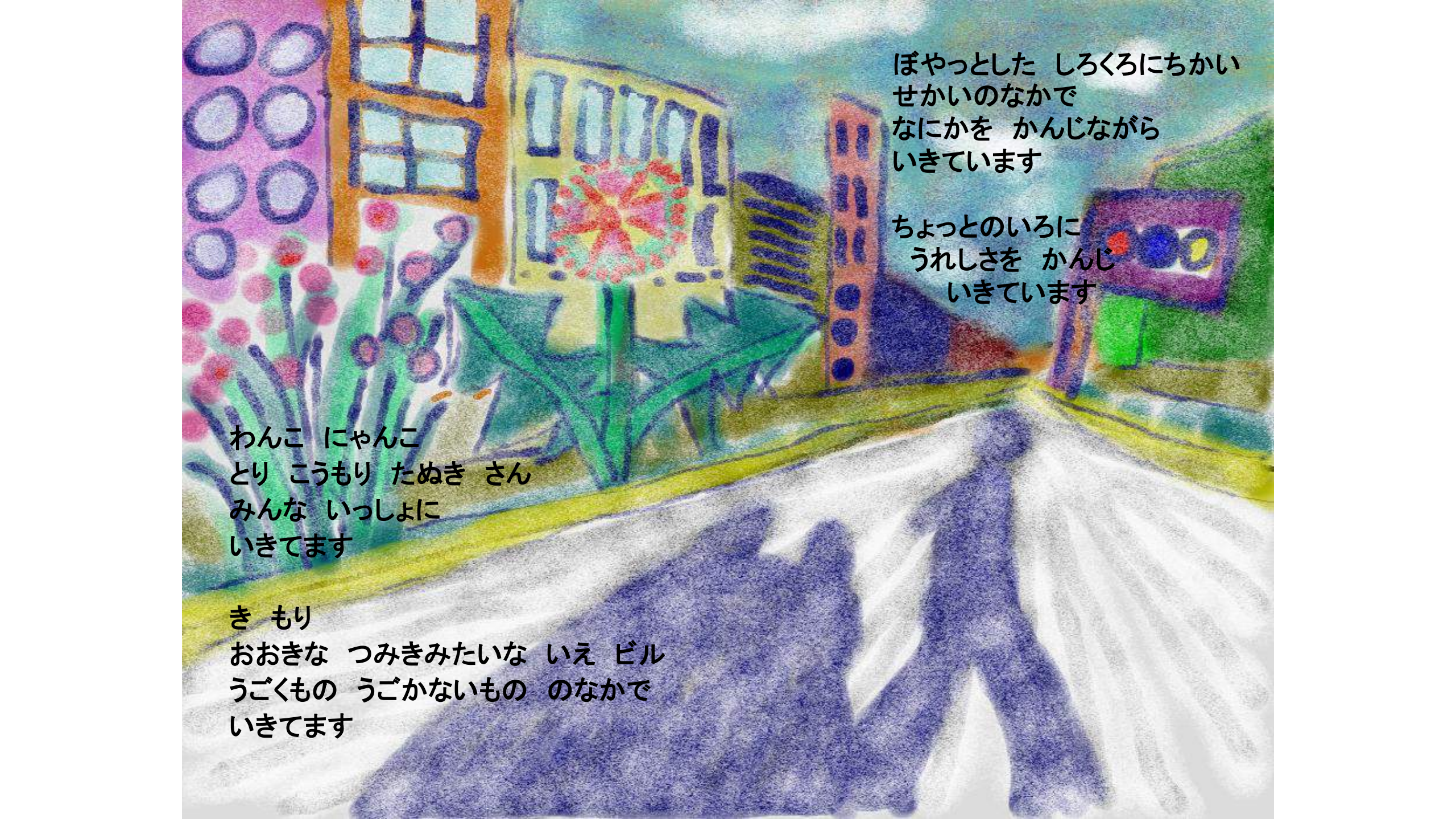
ちよっぴりいろ



ドクトルJOJO

あばうとBOOK





ぼやっとした しろくろにちかい
せかいのなかで
なにかを かんじながら
いきています

ちょっとのいろに
うれしさを かんじ
いきています

わんこ にゃんこ
とり こうもり たぬき さん
みんな いっしょに
いきてます

き もり
おおきな つみきみたいな いえ ビル
うごくもの うごかないもの のなかで
いきてます



いつだったのかな？
たくさんの かおのないひとに
きづいたのは

いつだったのかな？
おかあさん おとうさん
そして こどもたちの かおが
わかるようになったのは

だって
ちよっぴり
いろつき なんだ



あさ おかあさんに あうとき
だっこして もらうとき
おなかを さすられるとき
てや かおを なめるとき

おとうさんが かえってきたとき
おひざのうえで なでてもらうとき

いつだったっけ
むねが きゅんとなったのは
…きっと ちいさいころ

いつだったっけ
はじめてでも ときどきしない ひと
あうと うれしくなる ひと
さわってくれる あんしんできる ひと
こんなことが わかるようになったのは



いつだったっけ
ひとでないものでも
ときどきするものと しないものが
あることを かんじたのは

A child's drawing on a light background. At the top left is a large, textured yellow circle with a red center, representing the sun. To the right is a green tree with a dark trunk and a full canopy of green leaves. On the left side, there is a blue, stylized figure with a rounded head and a long, flowing body. The figure has its right arm raised, holding a blue circular object. The figure's body is composed of several rounded, stacked sections. The overall style is simple and expressive, characteristic of a child's artwork.

ぼくはしってる

ひとは なにかを
つたえあって
いきている

ぼくも だいすきな ひとと
つたえあって
いきている

めのまえの ひと
ぼくに いろんなことを つたえようとする

ぜんぶは わからないけれど
けっこう きもちが わかるんだ


だいすきな ひと
かおがわかる ひと
そして
はじめてでも ドキドキしない ひと

この ひとたちが いて
ぼくは 生きていける

しろくろの つみきのなかで
くみあわせ パズルの せかいのなかで
あんしんできる ばしょ と ひと

ちよつぴり いろつき





そのなかでもね…
それは おかあさん

おかあさんの まえで
ゆっくり できる

かっこう つけなくても いいんだ
あまえられるんだ



おかあさん おとうさん こども
みんな おんなじ だ
でも「ぼくは ちがう」
おかあさんと ちがった
ひと で なかった..

すこしまえ
おかあさんと いっしょに
かがみを みたとき
「あっ」と びっくりした

なにがって

ぼく と おかあさんは
ちがうってこと

ぼく と ひと が
ちがうって こと



なんだろう
びっくりした さみしかった

まわりの ひとたち
みんな ちがうけど おんなじ
ちいさい おおきい
でも おんなじ



みちであう おんなじような いきものは

おんなじ みたい
ときどき しないから

でも ときどき ちがう みたい
ときどき するから





そう ぼくは
ひと と ちがっている
そう きづいたんだ

おなじ ばしょに いても
ちがった せかいに いている
そう きづいたんだ



でも

さみしくは なかった

かなしくは なかった



ぼくは なんだろう...

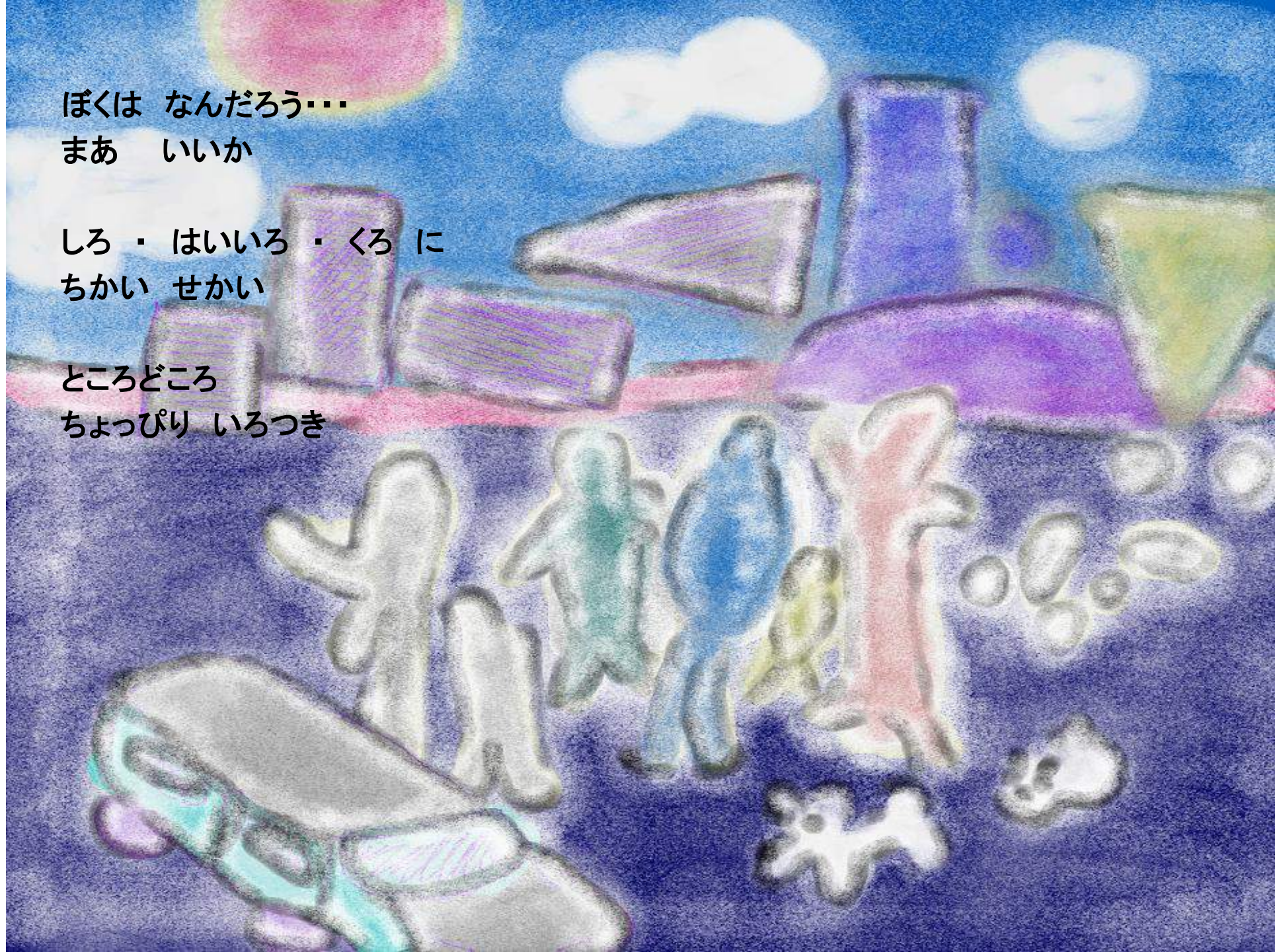
まあ いいか

しろ・はいいろ・くろに

ちかい せかい

ところどころ

ちよっぴり いろつき





そのなかの ちょっぴり いろつき

おかあさんは もも いろ

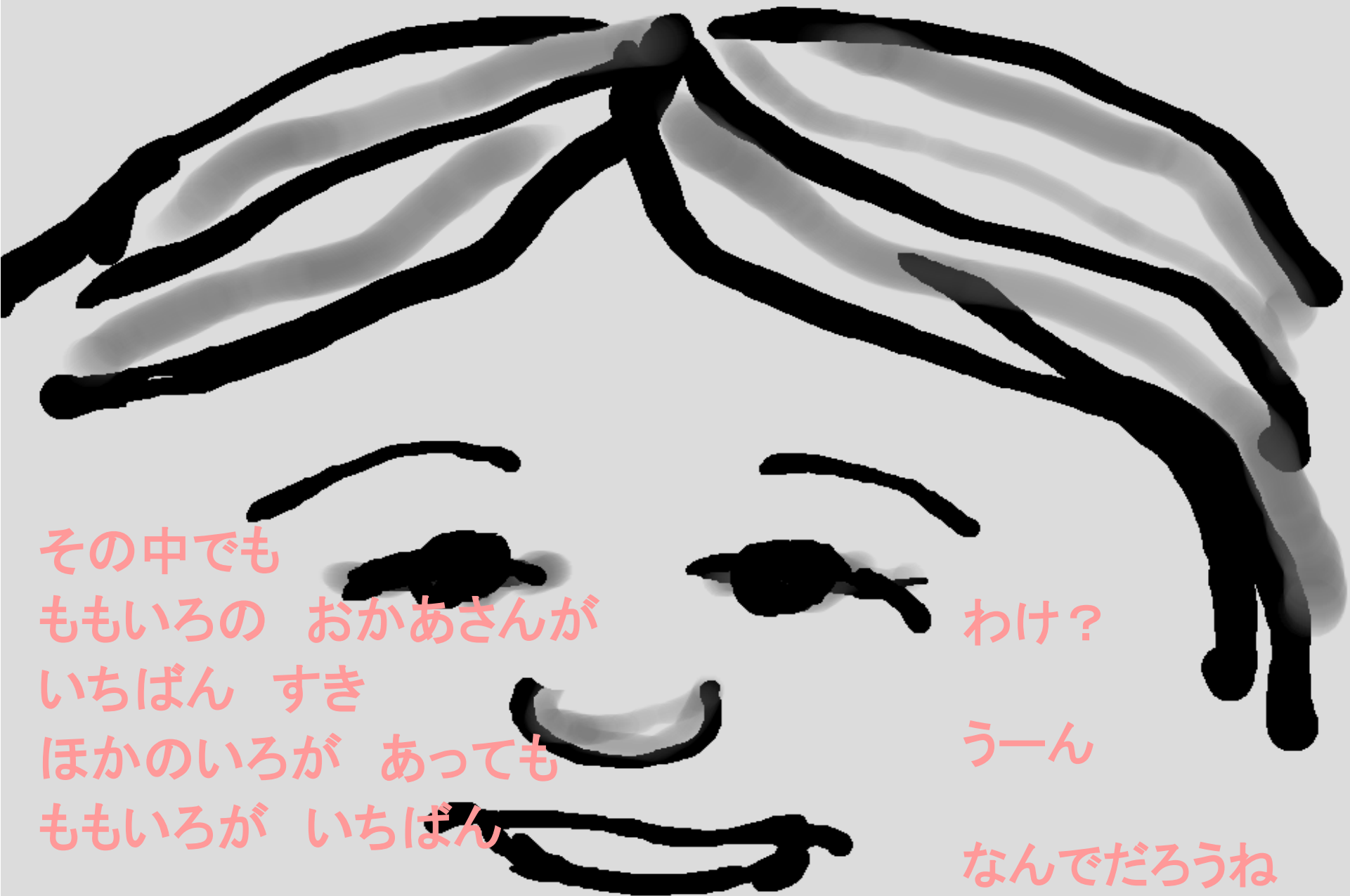
おとうさんは あお いろ

おねえさんは みかんちゃ いろ

おにいさんは みどり いろ

ちいさい おんなのこは きいろ

そこを めざせば だいじょうぶ

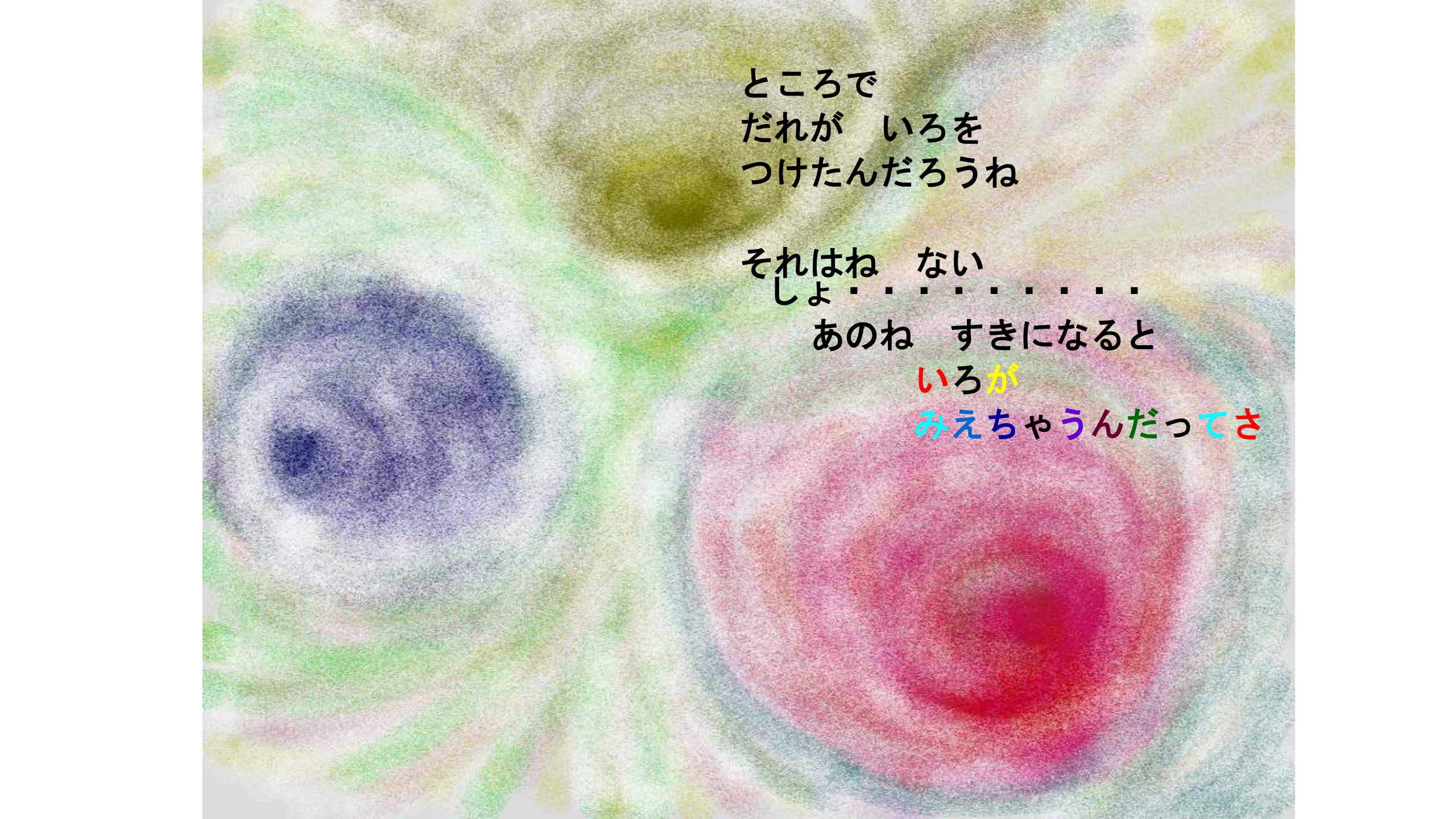


その中でも
ももいろの おかあさんが
いちばん すき
ほかのいろが あっても
ももいろが いちばん

わけ？

うーん

なんでだろうね



ところで
だれが いろを
つけたんだらうね

それはね ない
しょ

あのね すきになると

いろが

みえちゃうんだってさ

しろくろ と ちょっぴりいろ

- 我が家にワンコがきたのは、6年前。いろいろと泣かされもしましたが、現在それなりに落ち着いた生活になっています。
- そのわんこをみながら、「彼は誰に忠誠を誓って愛しているか」を肌で感じながら、そして「なんと、愛が欲しいと素直に表現をする生命体なのだろうか」と感じながらの日々が続いています。
- 「わんこは、白黒に近い世界で生きている」ということをはじめて知った中で、こんなお話しにしました。

2008年作成

お～さむ

あったか～



ドクトルJOJO
あばうとBOOK



第一站



さむい
ふくを

ときは
きましよう

すこし
あたたかくなりました

でも まだ
お~さむ



さむい ときは
てぶくろを しましょう

でも まだ
お~さむ

すこし
あたたかいです



さむいときは
マフラーです

すこし あたたかです



でも まだ
お~さむ



さむいときは
毛糸のパンツ

むずむず

でも まだ

お~さむ



さむいときは
くつを
はきましょう

ばっちりです

でも やっぱり
なんと いても

うちの なか
コタツです

あったか〜い



でも やっぱり
なんと いても
うちの なか

ストーブです



あつたか〜い



コタツで ねても
ストーブの前で ねても

あ～ ね む い

お や す み

な さ～ い

なにを してても

し あ わ せ





お～さむ あったか～

- 「犬はよろこび庭かけまわり、猫はこたつで丸くなる」と思っていました。
- でも・・・わんこも、猫と人と一緒に、あたたかいところが大好きのようにです。
- もちろん、雪の中で走り回り、積もった新雪の海に飛び込んで、ラッセルすることも大好きです。
- 家の中での姿が可愛らしく、こんな風にしてみました。

2009年作成

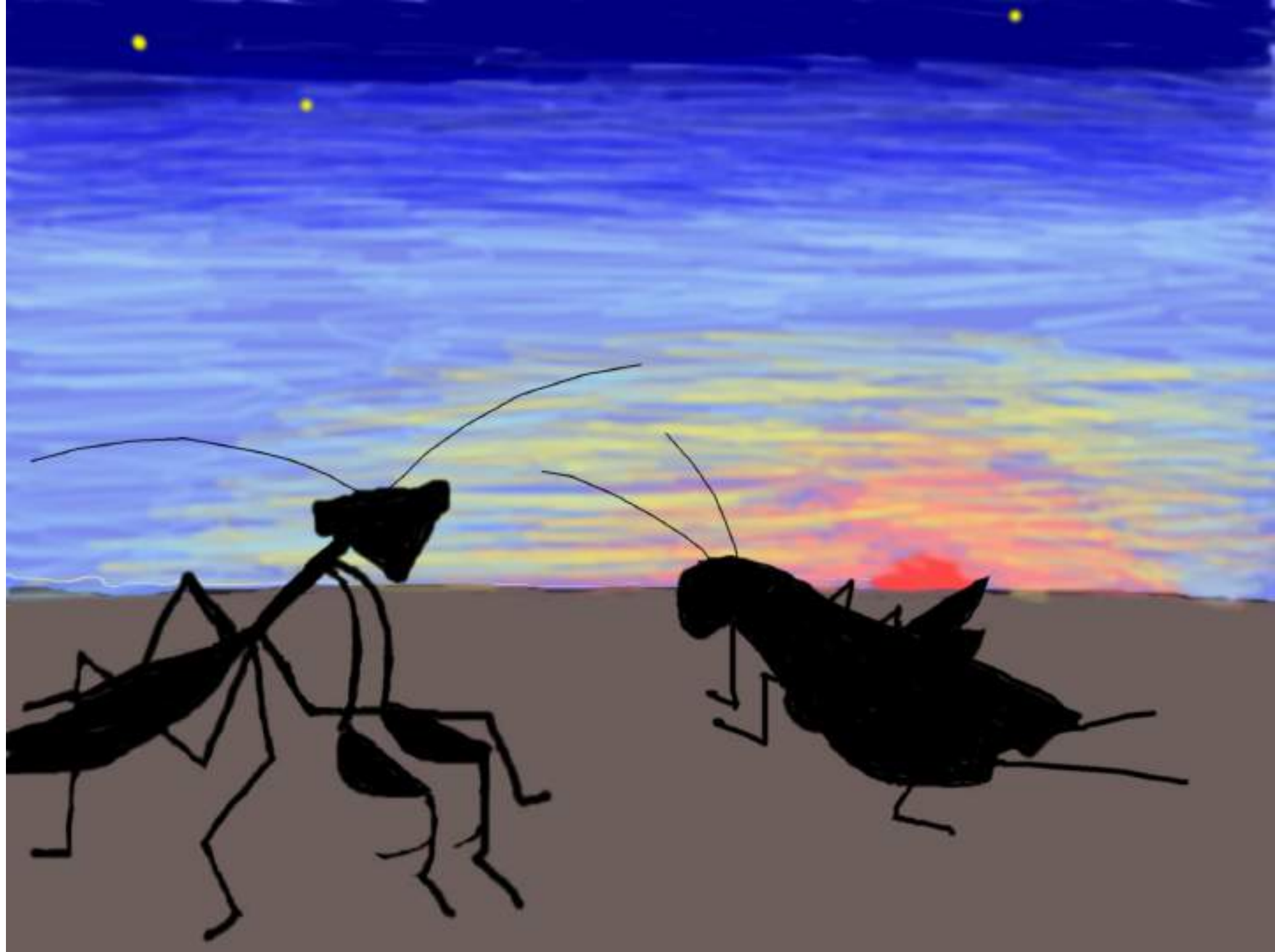
真夏の昼の出来事



文と絵

ドクトルJOJO

あぼうとbook



ある暑い 夏の日の ことです

散歩から 帰ってきた
おじいさんコオロギと
おばあさんコオロギが
お話を していました

「いつ 来るんでしょうね？」
おばあさんコオロギは
言いました

「きっと 昼の12時までには くるよ」
おじいさんコオロギは
答えました



遠くに 住んでいる こどもが
久しぶりに 帰ってくるのです

都会に 住む 息子が
お嫁さんを 連れてくるのです

おばあさんは
嬉しくて ときどき しています
ずっと 息子に 会っていなかったからです

お嫁さんが どんな人か
知りたかったからです
そして
お嫁さんと 会いたかったからです



きのうの夜 おばあさんコオロギは
眠れませんでした



「何時に くるのだろうか」
「きっと お昼前には つくだろうから
..お昼ごはんは 何にしよう」
「孫は お腹の中に いるのかしら」
「お嫁さんは 私を
好きになってくれるかしら」

おじいさんは 心臓が ドキドキです
心配で きのうは 眠れなかったのです

そして 今も ドキドキです
会えることへの ドキドキでは ありません
無事に着くかどうか 心配で 心配で たまらなかったのです

だって「家を出たよ」
との電話があつてから
もう2時間半
たったからでした

「何時ころ 着くのだろう・・・車は大丈夫だろうか・・・
途中で こわれて 止まったのだろうか・・・
どこかの川に 落ちたのでは・・・
『無理して帰って来なくてもいいよ』 と言えば・・・アア・・・」

頭の中は ぐるぐるです 家の中へ入ったり 出たり



もうすぐ 12時

いつまでたっても 来ないので
心配ばかりの おじいさんは
家の外に 出ました

太陽は 真上
外は おふろの中 みたいで
道には かげろうが たっていました。

木に セミが しがみつき
ここぞとばかり 鳴いていました

ミーン ミーン ミーン ミーン
ジー ジー ジー ジー



おじいさんは こう 思いました
「きっと どこかで 休んでいるのかも」
「途中で パンクしたかも……」

「いや ひょっとすると……」
「事故にあって 二人とも 気を失って
倒れて いるのかも しれない……」

「おまわりさんは 連絡先が 分からないので
ここに 電話 出来ないのだ」
「ひょっと じゃなくて…きっと 事故だ」
「あっ～ どの病院に 入院したのか……」
おじいさんは すっかり その気です

でも おばあさんに
不安な気持ち が 伝わらないように
がまん しました

おばあさんも 家から出てきて
おじいさんと 一緒に 立って
道路の先を 見つめました

車が 見えるはず..
だったからです

じいーっと ずうーっと
二人して 見つめ続けました

でも……

おじいさん と おばあさん は
家の中にもどり 電話の前に 行きました



おじいさんは 勇気を ふりしぼり
震える声で 話しかけました

「おばあさんや おまわりさんに 電話しよう…かね…大丈夫…と思うけど…」
「午前中には着くはず…でもまだ着かないし…事故…いやいや…」

本当は 心臓が
体の外に 飛び出るほどに
ドキドキ していたのです

すぐにでも おまわりさんに
電話したかったのですが
おばあさんの前で がまんしたのです

おばあさんも 本当は
心配で 心配で しかたなかったのです

でも それを おじいさんに 伝えると
もっと 心配するので
がまんしたのです

「そうですね」といって
そのまま 黙ってしまいました



そして 二人は また外へ出ました
キラキラと 照りつく 太陽のもと
おばあさんは おじいさんの 手を取りながら
道の真ん中で 待ち続けたのでした

お互い 声には出しませんでした
心の中では 一生懸命

「無事について..それだけ..おねがい..」
汗だくの姿は 真剣でした

暑い中 汗だくで 立ち続けたのでした

もうすこし・・・
もうすこし・・・
もうすこし・・・

心配・・・でも
おじいさん おばあさんは
おまわりさんに 電話できないのでした

立って待っている姿は
おじいさん おばあさんの
気持ち そのものでした

でも・・・セミは
激しく なくばかりです

おじいさんは
決めました。
「おまわりさんに
電話しよう」

家に入ろうと
向きを変えようと思いました



そのときです

草むらの ずっと ずうと ずうと その先で

遠くに 遠くに

車の姿が
見たのです

黒っぽい
青い車で
卵型の
ずんぐりした 姿は

以前 見た
息子の 車 でした



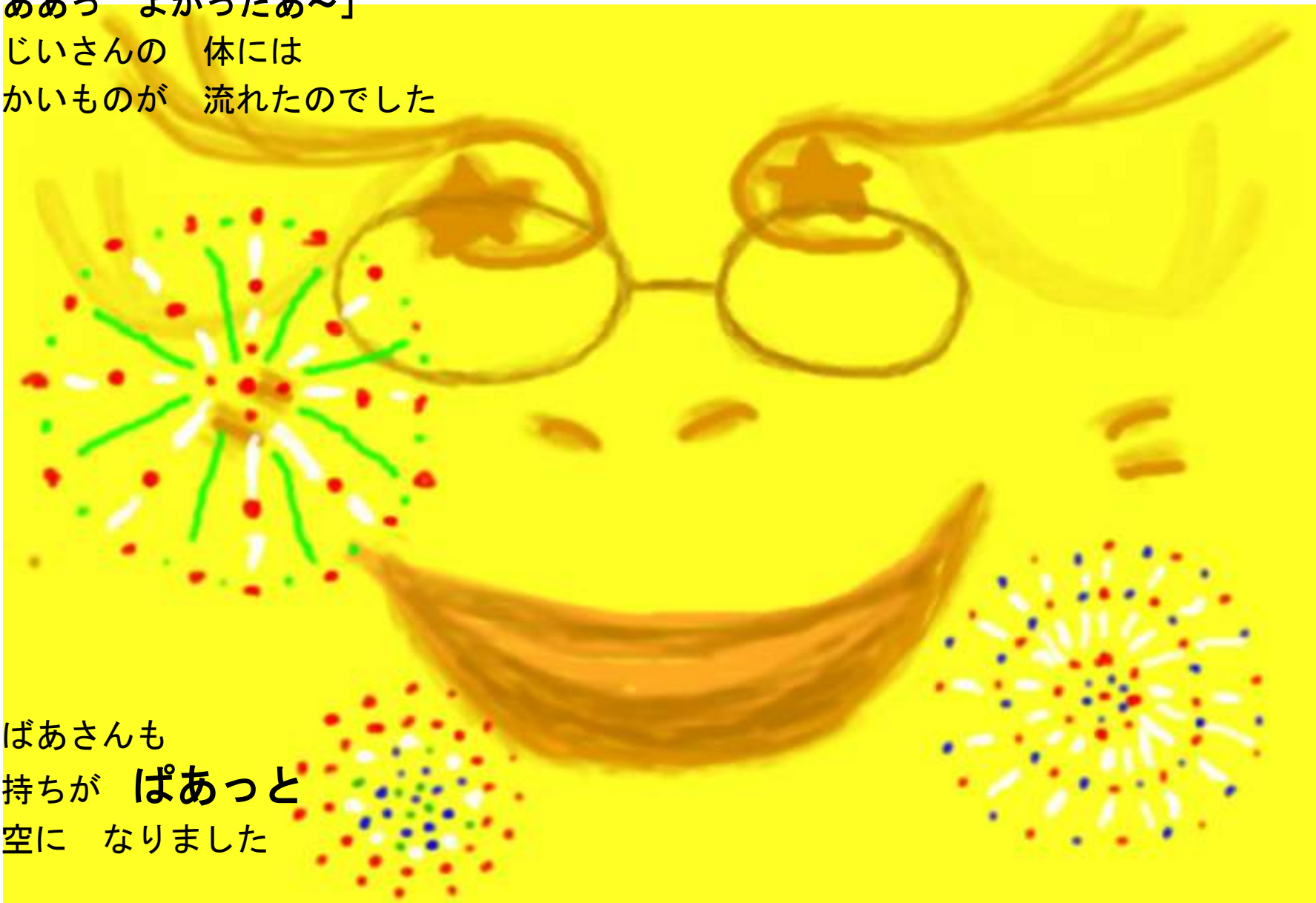
近くに 来ると
ハンドルをもつ 息子が
見えました
笑顔 です



その横には お嫁さんです
車の中で 挨拶を しています
笑顔です

「ああっ よかったあ〜」
おじいさんの 体には
暖かいものが 流れたのです

おばあさんも
気持ちが **ぱあっと**
青空に なりました



息子は

「どうして 暑い中 道路の真ん中で 待っていたの」

「家の中で 待っていれば いいのに」

にこにこ 話しかけてきました

「いやいや よかった よかった」

「心配で 心配で・・・ 待っていたんだよ」

「ふーん 暑いのはなあ」

「さあ さあ 家の中に・・・入って 入って・・・」



おじいさんと おばあさんは

暑さを忘れての 凍りついた世界から 生きている暖かい世界に 戻ったのです

ほっ







真夏の昼の出来事

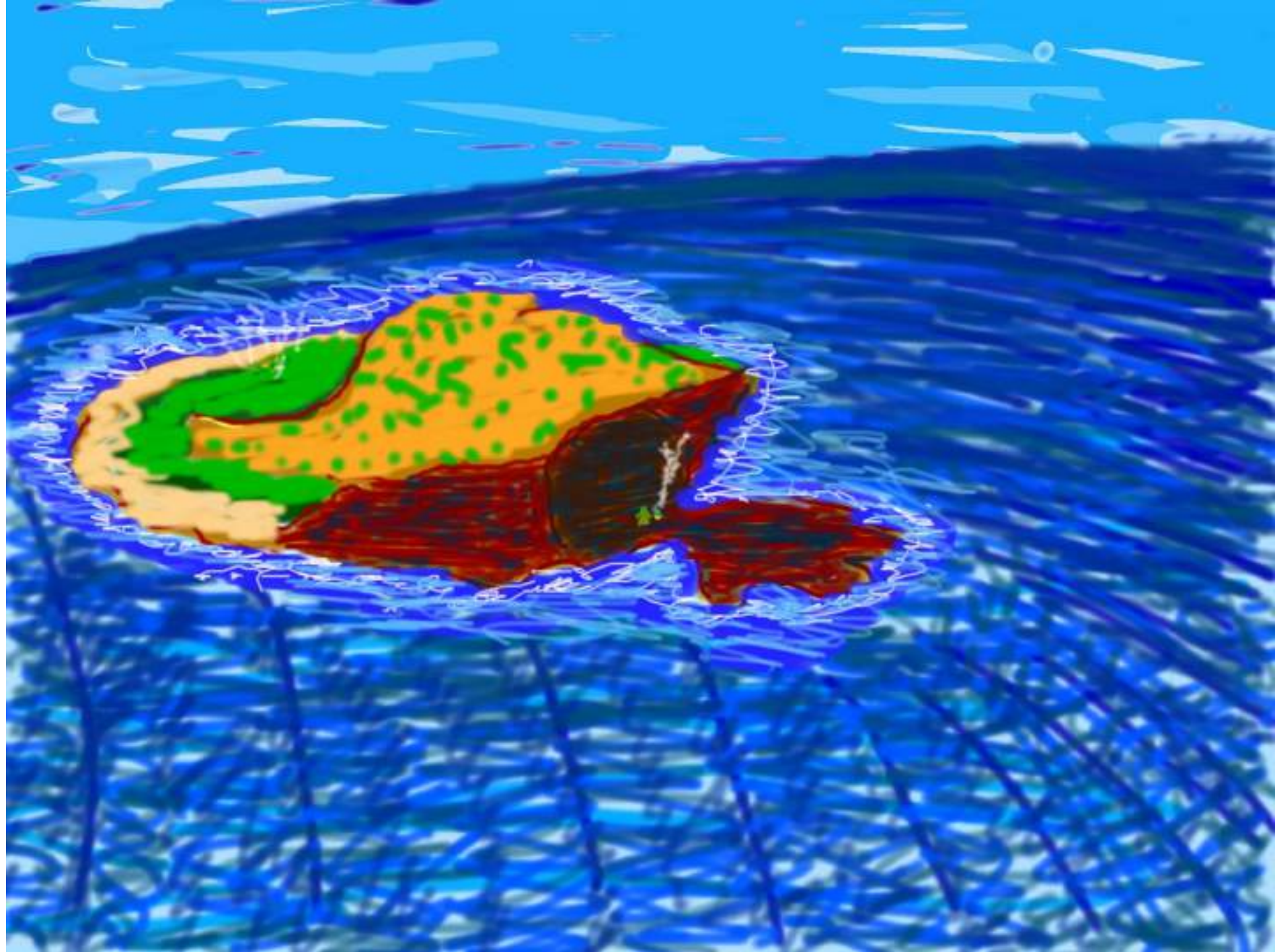
- 父母と離れて暮らしていたときの経験を、まとめてみました。
- こんなシーンがあったのでした。
- 父母の思いは、いかばかりであったでしょう。
- 子に対する親の気持ちです。強い絆を感じます。
- 人を描くのは難しい中で、人をコオロギに置き換えてみました。

2009年作成

いゃんばかん鬼



ドクトルJ O J O
あばうとbook



ある島の 突き出たところに 体の大きな 鬼さんたちが 住んでいました
お父さん鬼 お母さん鬼 と 赤ちゃん鬼です

そして 島の もういっぽうには 体の小さな 人間たちが 住んでいまし
た

鬼さんの顔は いつも 赤いのです 怒っているみたいで 怖そうです

ある時 赤ちゃん鬼は 水たまりで
自分の 顔や体を 見ました
おとうさん おかあさんと 似ているけど
時々遠くに見る 人間達とは 違います





赤ちゃん鬼は 人間の子どもと 遊びたくても
人間の所へは いけませんでした

お父さん お母さんも やさしく 言うのです
「行っては いけないよ～ん
いっちゃ いや～ん だよ～ん」

「ぼく つまんないな・・・」
赤ちゃん鬼は
つぶやくのでした

鬼と人間は 互いに 怖がっていました

「人間って 鬼をこらしめに来るに 違いない」

「桃太郎のお話も あるし…」

「離れて 暮らそう」

「鬼って 怖そうな顔で いつも 怒っているんだって」

「口の中には りっぱな キバがあるんだって」

「鬼って 人間を 食べるに 違いない」

という具合です



さて ここは 村人が 魚の骨を 捨てるところです
村人は たくさん 魚を食べるのです
そして 食べた魚の あたまの骨が
捨てられています
硬くて 食べられないからです

魚の頭の骨は すごく かたいので
魚の好きな ねこも
かむと 歯とあごが 痛くなって
泣くほどです

一方 鬼さんたちは
魚のあたまが 大好きです
味と かみごごちが
ちょうど よいのです
歯もとぐ、いや磨くことが できます



村で 魚の骨が 捨てられているのを
鬼さんは 知っていました

「捨てられて いるんだ・・・」

「もったいない・・・」

「貰っちゃおっ かな・・・」

と 持って帰ることに しました

持ち帰るために
夜に 村に 来たのですが

その後ろ姿を
たまたま 村人が
見かけて しまいました



さあ 大変です

「え〜っ

捨てたはずの 魚のあたま や 骨は
大きな鳥さんや くまさんが
食べていたんじゃ なかったんだ」

「鬼さんが 食べていたんだ

きっと 鬼さんは あたまの骨が 大好きなんだ
…きっと…

人間のあたまも 好きに 違いない…
…どうしよう…」

村人は 夜 寝るときには
あたまに ずきんを
かぶり はじめました

かじられない ためです



お地蔵さんの あたまが なくなったことが ありました
誰かが 言いました

「きっと お地蔵さんのあたまも 鬼さんが…食べたんだよ」

「ひえー」 「くわばら くわばら」

でも 本当は ただ壊れて 地面に 落ちたのでした
それを いたずら好きの たぬきさんが
遊ぶために
持って行って しまったのでした



そんなこととは 知らない
村人は「こわ〜い」話し として
子どもたちに 話すのでした

「悪いことをすると 鬼さんが 来て
頭を 食べちゃうぞお〜
頭が かじられちゃうぞ〜」

子どもは 大人の言うことを 聞き
「鬼さんって こわいんだ」
そう 思ったのでした



そんな 大人の話を 聞いた
赤ちゃん鬼は
びっくりし
悲しくなり

涙を
落とすのでした



ある夜 赤ちゃん鬼が
村の近くに 散歩に 行くと

魚の骨が
ちらばって いました
カラスが つついた からです

きれい好きな 鬼さんは
からすを 追い払い
そうじを はじめました



そして 大好きな 魚のあたまの骨・・・

「おいしそう」

「食べよう」

「残りは 袋に入れて
持って帰ろっと」

赤ちゃん鬼は
食べ始めました

突然 現れた
鬼さんの 姿をみた 村人は
こわくて 家の中に
こもりました

あたまを
かじられたり・・・しないか
本当に 心配です



鬼さんが 去った後 道は すっかり きれいです
村人は うれしくて びっくりです きれいになったからです

でも こわくて こわくて
魚の骨を 鬼さんが 食べて… そして 持って帰ったのですから
「やっぱり…人間の頭も 食べたいかも…」
「頭を かじられたら どうしよう」
村人は そう 思ったのです

いっぽう 村の 子どもたちは
うれしかった のです

子どもの 仕事だった
ゴミ捨て場や 道の そうじを
しなくても よくなった からです

村の子ども達は お手紙を 書きました



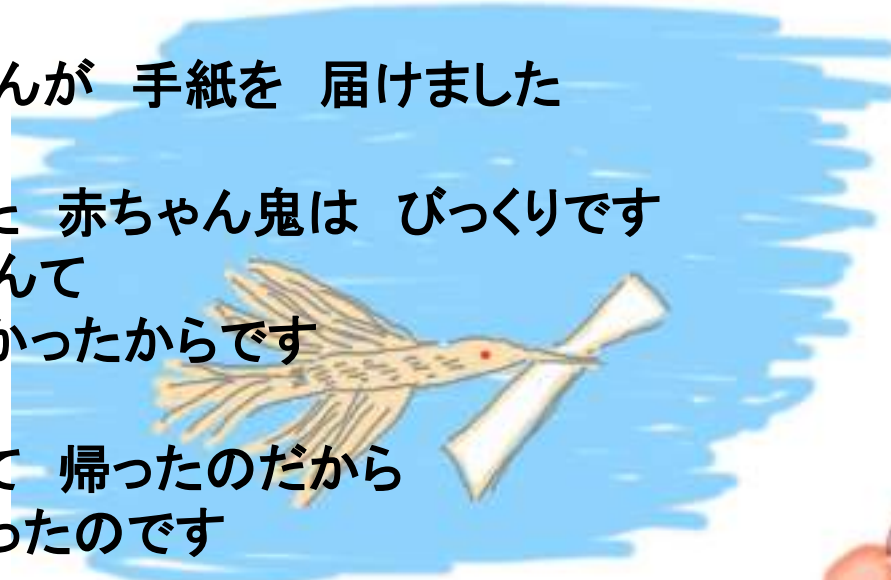
「鬼さんへ
このたびは 道を きれいにしていただき まことに ありがとう ございました。
ついては もし 怒っていないなら 遊びに 来て下さい。
その時は 白いパンツを はいてきて 下さい。」

とりの郵便屋さんが 手紙を 届けました

手紙を もらった 赤ちゃん鬼は びっくりです
褒められる なんて
思っても いなかったからです
魚の骨を
だまって 持って 帰ったのだから
怒られると 思ったのです

手紙を読んで
「いや～ん ばか～ん」と
つぶやき 顔を 赤らめるのでした

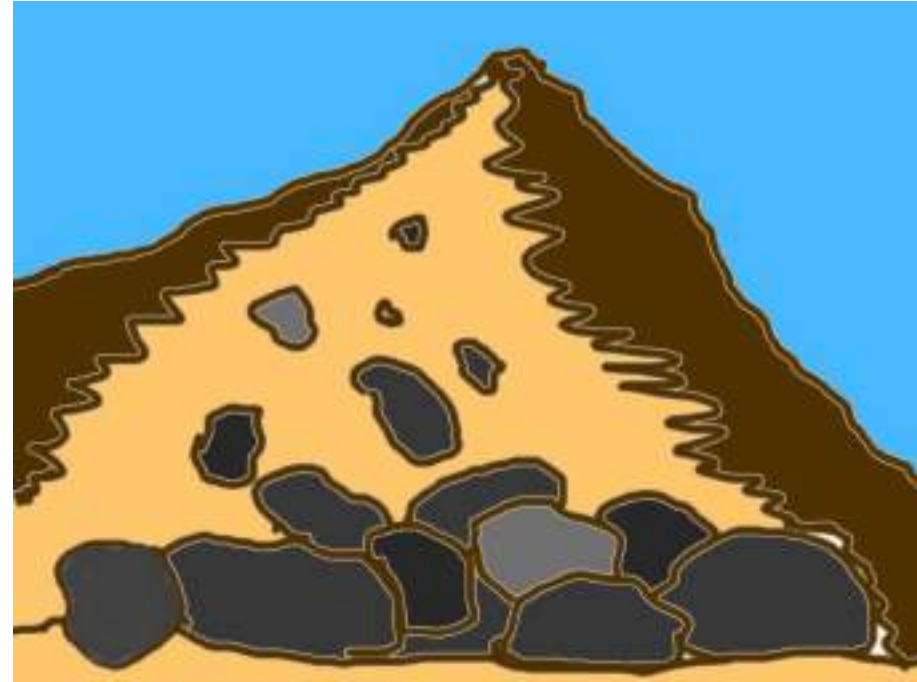
「遊びに いきたいな～。でも ぼく
白いパンツ もっていないんだよ～ん。
いや～ん ばか～ん」



あるとき ながい大雨が やっと あがりました
村人が 海への道を 通ろうとしたとき 崖が崩れ
ごろがらん ごろがらんと 大きな石が 落ちてきました

さあ 大変です
あっちも こっちも 崩れてしまい
海へ 魚を 採りに行こうとした 村人は
村にも 帰れず 海にも いけず です
さあ どうしましょう

それに気づいた 鬼さんは
「こりゃ 大変だよ～ん 助けねば
でも 相手は 鬼をいじめる 人間だし 怖いし…
すぐに 鬼と 分かってしまうだろうし…
どうしょ～ん…」



鬼さんは いっしょうけんめい 考えました
「よし 大きな服で 体を 隠していこう」
「隠すのは ツノも だよ～ん」
「おっと 顔は どうしよ よ～ん」

鬼さんは 家にもどって
いつもは着ない 服を 着ました
そして ツノも隠せる 笠を 頭にかぶり
顔には マスクを しました

すごい かっこう です

そして がけに 行って
道を ふさいでいる
大きな 石を
せっせと とりのぞきました。
汗だくです

暑くなり 着物を
ぬぎたくなった のですが

もちろん がまん しました



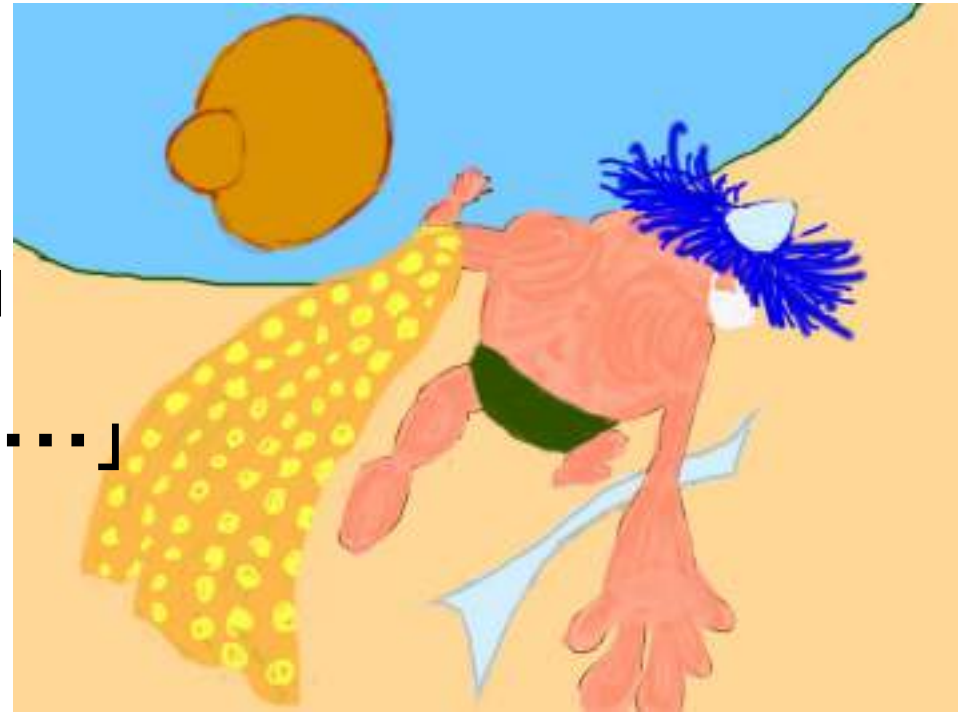
村人は 言いました
「ありがとう ございました どなたかは 知りませんが
体の 大きな 人ですね みたこともない くらいです
後で お礼に 行きたいと 思います
お名前を 教えて ください」

鬼さんは 声も 出せず
『いえいえ』と 手を 振るだけ でした
そして 急いで さようならを するために
手をふって そこを 走り去り ました

あまりに 急いで 速く走ったので
着物を はらりと 落として しまいました
あたまに かぶった 笠も です

「えっ ああ・・・」「ひえー びっくり」
「えっ えっ ああ・・・」
「助けてくれたのは 鬼さんなんだ・・・」

村人は 腰が 抜けました



村に帰った 村人は みんなに その話を しました

この前には そうじをしてくれた 赤ちゃん鬼さんのことも ありました

村のみんなは 鬼さんは 親切で 恥ずかしがり屋さんである ことも 知りました

そして みんなで お手紙を 書きました

鬼さん この間は まことに ありがとう ございました。 本当に助かりました。

お魚もとることも 村に帰ることも 出来ました。 これもみんな 鬼さんのおかげです。

鬼さんは いつも怒っていて 怖いのかと 思っていました。

でも そうではないことを 知りました。 ごめんなさい。

ついては これからも 心ゆくまで 魚の頭を 持って行って 食べて下さいね。 きっと好きなんだ と思っています。

たまには 遊びに きてくださいね 鬼さんが やさしいこと 知ってます。 魚の頭を たんと 用意して おきますね。 それから 人間の頭は おいしくありません。

また 白い布を さしあげます。 怒っていないのなら 白いパンツをはいてきてください。

村長と村人と子どもたち 一同

鬼さんは びっくりしました 村人が こらしめにくる と 思ったからです

鬼さんは 村人が 喜んでくれたことを 知り
つい「いや～ん ばか～ん」と うれしくて はずかしくて 言ってしまいました。
そして 涙が 流れました

でも なんで「人間の頭は おいしくありません」と言うんだらう
鬼さんは わかりませんでした

それから 鬼さんは 赤ちゃん鬼をつれて
村に 遊びに行くようになり ました

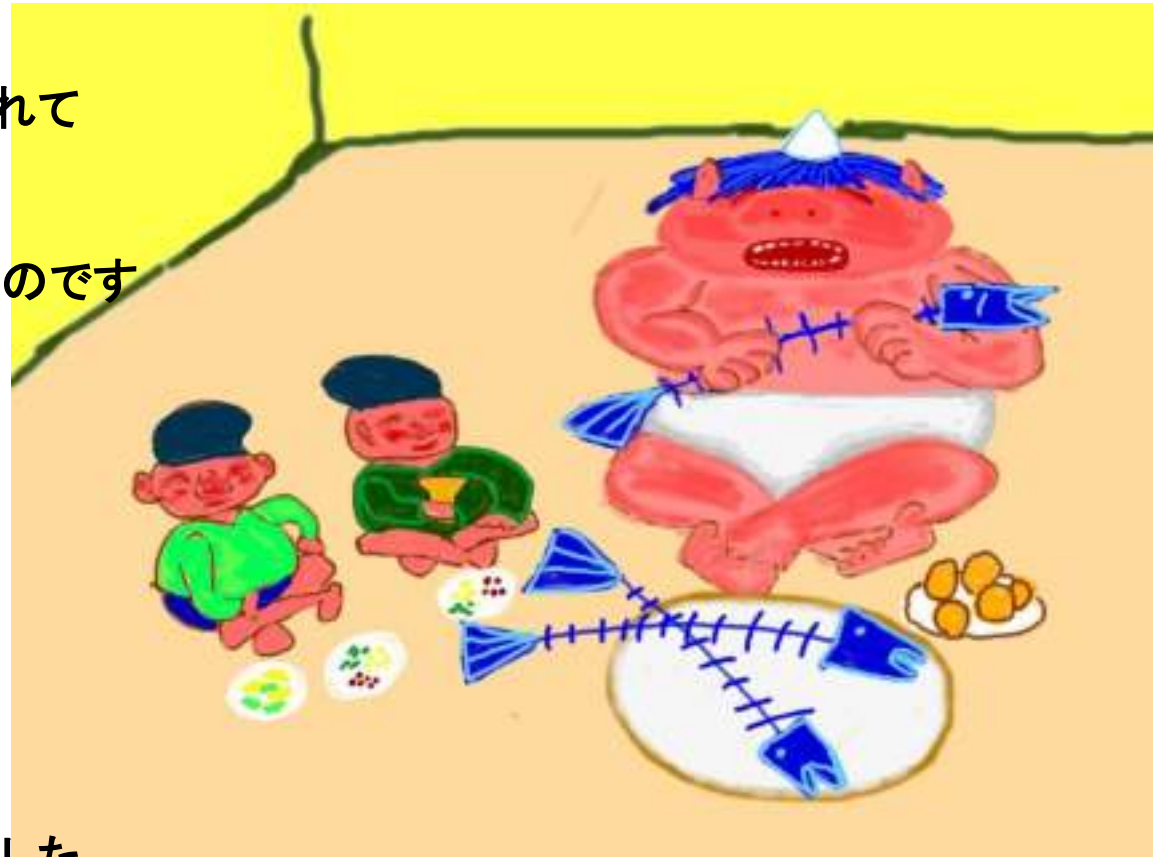
村人と いっしょに ごはんを 食べるのです
楽しい のです

もちろん 新しく作った
白いパンツを はいてです

そして 大きな 魚の頭が お皿に
のっている のでした

ときどき「いや～んばか～ん」と
鬼さんが 言うことを 村人は 知りました。

どうも 鬼さんの 世界では
うれしいときに 使うよう です



その後

村人から ときどき お手紙が 来るように になりました。
手伝ってほしいことが あるときでした

大きな木の かぶなどは 人間には 取り除くことが できないのでした
鬼さんは なんなく やってしまいます

あいかわらず うれしいときには 「いや～ん ばか～ん」と 言ってしまいます
村人は どっと 笑ってくれます

何だか わからないけれど
鬼さんは うれしくなり
また 顔が ぽっと 赤らみます

そして また つぶやくのです
「いや～ん ばか～ん」

いつしか 鬼さんが 頭を食べる
お話しは 語られなくなり

そして みんな なかよく 暮らしました





いやんばかん鬼

- 子どもが小さい頃、山にキャンプに行った夜のこと。真っ黒な夜、テントの中で、いい加減な話しをしたのです。でも、子どもたちに大いに受けました。みんなで大笑いをしたのでした。
- その時の話しの題名が、「いやんばかん鬼」でした。
- 残念ながら、話しの内容は、忘れてしまいました。今回思いつくままに、作り直してみました。
- 必然性のない話しかもしれませんが、ご容赦を。

2009年冬



おなら ぷー

ドクトルJOJO
あばうとbook

よちよち歩き

「ぷっ」と 聞こえて ほほえんだ 日

しあ～わせ

やってきた 子犬

「ぷっ」と 聞こえて 笑った日

しあ～わせ

それでは・・・

よち よち の

ぶつ



わん わん の

びゅ



ごろ ごろ の

ぶ〜

にゃあ





ぴよ ぴよん の

ぷい〜

けろ けろ の

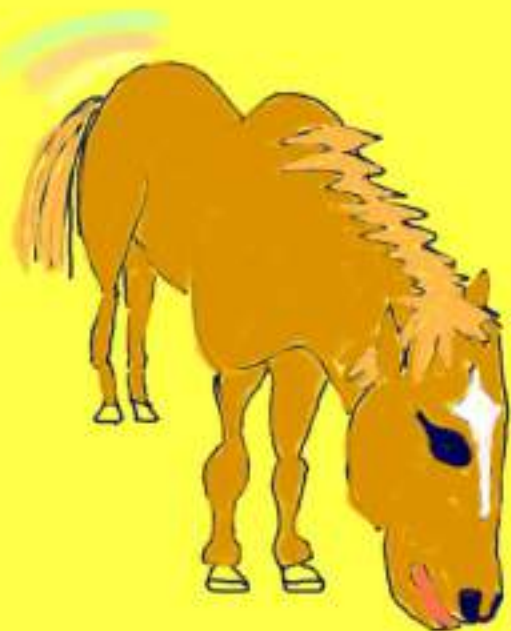
スカッ





ひ ひーん の

プ〜ス〜



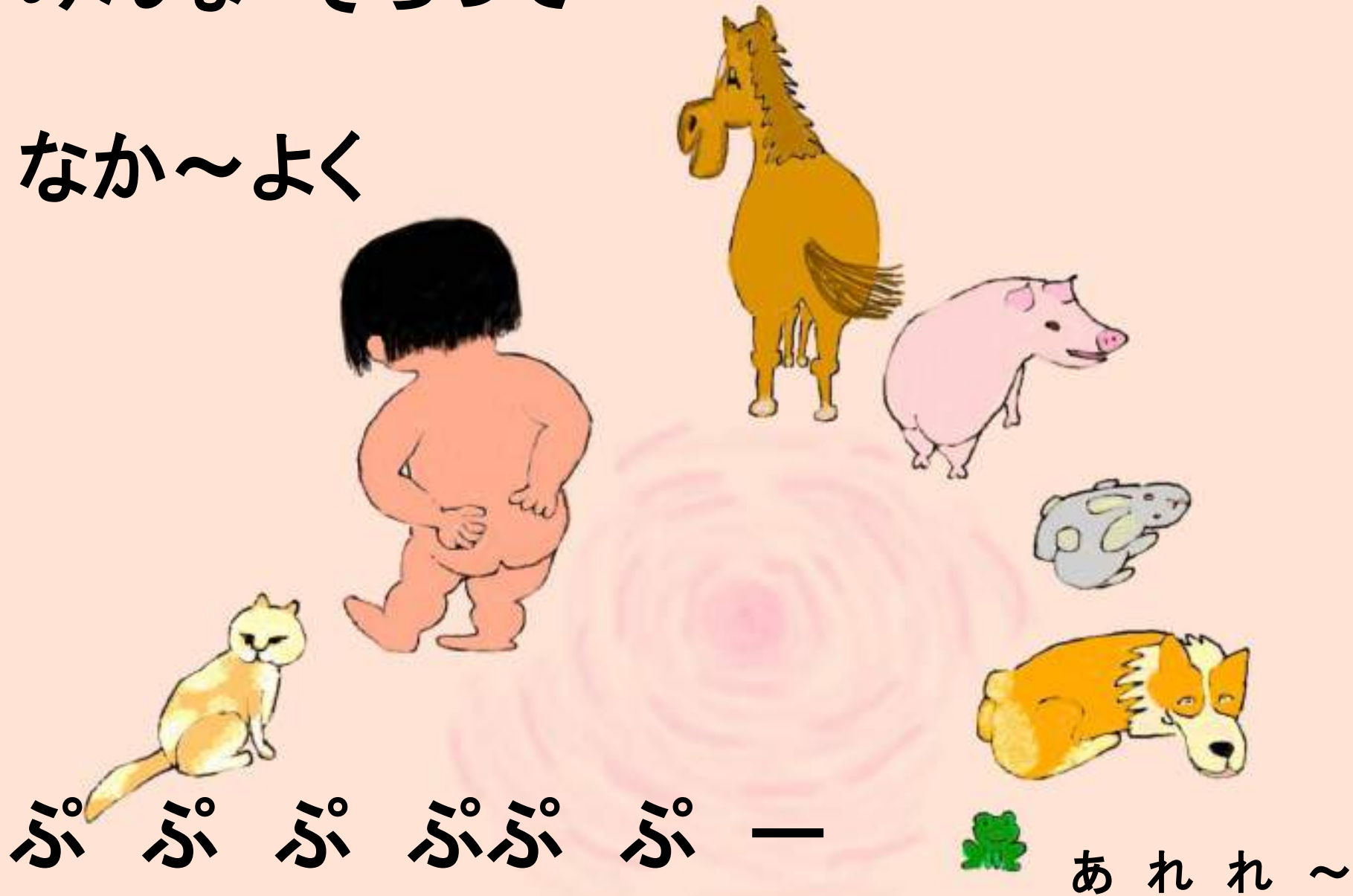


ぶ ひひ～ の

ぶ～す～

みんな そろって

なか～よく



ぶ ぶ ぶ ぶぶ ぶ —



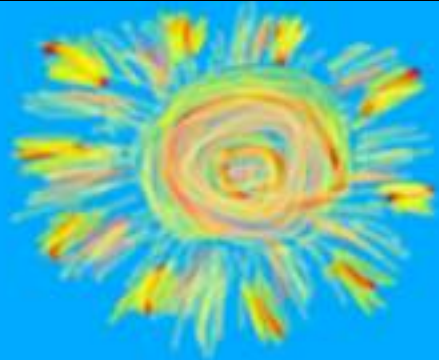
あれれ～

おなら ぷー

- 我が家に来たわんこが、幼少の頃のお話です。
- 「ぷっ」となる音に、大いに笑わせられました。
- 考えてみれば、わが子の「ぷっ」も幸せでした。
- その時、振り返った時に見せてくれた、わんこの恥ずかしそうな顔が、ほのぼのと素敵でした。
- たったその一つの音が、人生に幸せをもたらしてくれる、というお話しです。

2010年 春

コーギーの 自転車こぎ



ドクトルJOJO
あばうとBook

コーギーわんこが

ギーコーギーコーギー
コーギーコーギー……

汗を かきながら
自転車を こいでいます

だって コーギー ですもの
ギーコー というのは 得意なはず

でも 大変

だって
足が ペダル から
離れたり します

でも
自転車に 乗るのは 大変

だって
ハンドルを 握れない のです

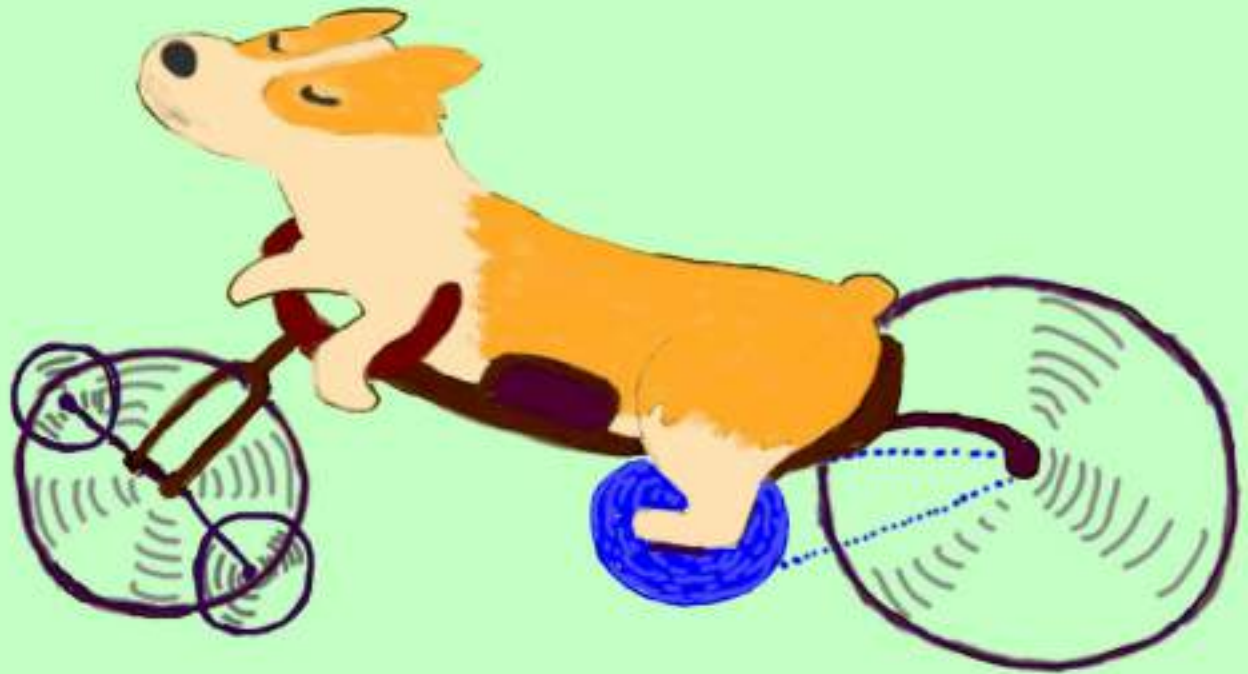


胴長で 手足が 短いのは 生まれつき
おまけに ハト胸です
自転車に 乗るには 向いて いません



だから コーギーわんこのため
特別の 自転車が つくられました

みてください・・・
よかったですね～



ある日のことです
三輪車を はじめて みました

手足の短い 子どもが 乗っています
ひょっとすると 僕にも 乗れるかも~!

すぐ 飛びつくのが
コーギーの よいところ

遊びたい 気持ち
いっぱい です



そして・・・ あっら～

ほんと ぴったりです
ちょうど いいのです



自転車や 三輪車に のった
コーギー

ヒーローです

草原を はしり
街中を 三輪車で はしる
改造自転車ではしる
コーギーわんこ

みんな 素敵ですね
かっこいい ですね



街中を ギーコーギーコーと
三輪車 や 自転車に乗って
コーギーが
走っています



そこから ギーコー
いや コーギーと 名前が ついた？
人は そう 思い始めて いました…



ともかく

いいよね これで



だって

面白いんだもん

コーギーの 自転車こぎ

- これは、我が家のコーギーわんこが主役です。
- 大いに、私たちの人生に貢献してくれている事が、わかります。全く感謝です。
- 今回は、駄洒落の世界・・・のつもりです。
- @@@ギャグ？

2010年 春

怒りんぼ鬼さん と
喜んでばかり鬼さん



ドクトルJ O J O
あばうとbook

むかしむかしの そのむかし
ある山に
鬼さんたちが 住んで いました

その中に
怒りんぼ鬼さんが いました
顔が 赤いのです

怒ると もっと 赤くなります
子どもですが こわいのです

怒ってばかりなので
褒められても うれしく ありません

むしろ
「怒っている 僕が 本当の 僕」
と いうわけです



同じ村に

喜んでばかり鬼さんが いました

顔は にこにこして うすい茶色 です

喜ぶと 目 や 口 が
とっても やさしく なります

大人で 体は 大きい のですが

それはそれは やさしく
うれしい ことが あると
つい 泣いて しまいます





山には 木の実が このところ 少ないので
海の 食べ物を 手に入れようと
怒りんぼ鬼さん と 喜んでばかり鬼さん が
手に 木の実の お土産を 持って
海に やって きました

大きな カメさんから
貝 や 海藻 を 分けてもらう ためです
カメさんは、貝 や 海草を もぐって 取るのが
得意 なのです

怒りんぼ鬼さんは、
「僕 お魚が 食べたい」
「貝や 海藻は 嫌いだ」。
そう カメさんに
目を赤くして 言いました。

まだ 食べたことは ないけれど
お魚が 美味しいことは 聞いていました。
そして 貝や海草が おいしいことは
知らなかったのです



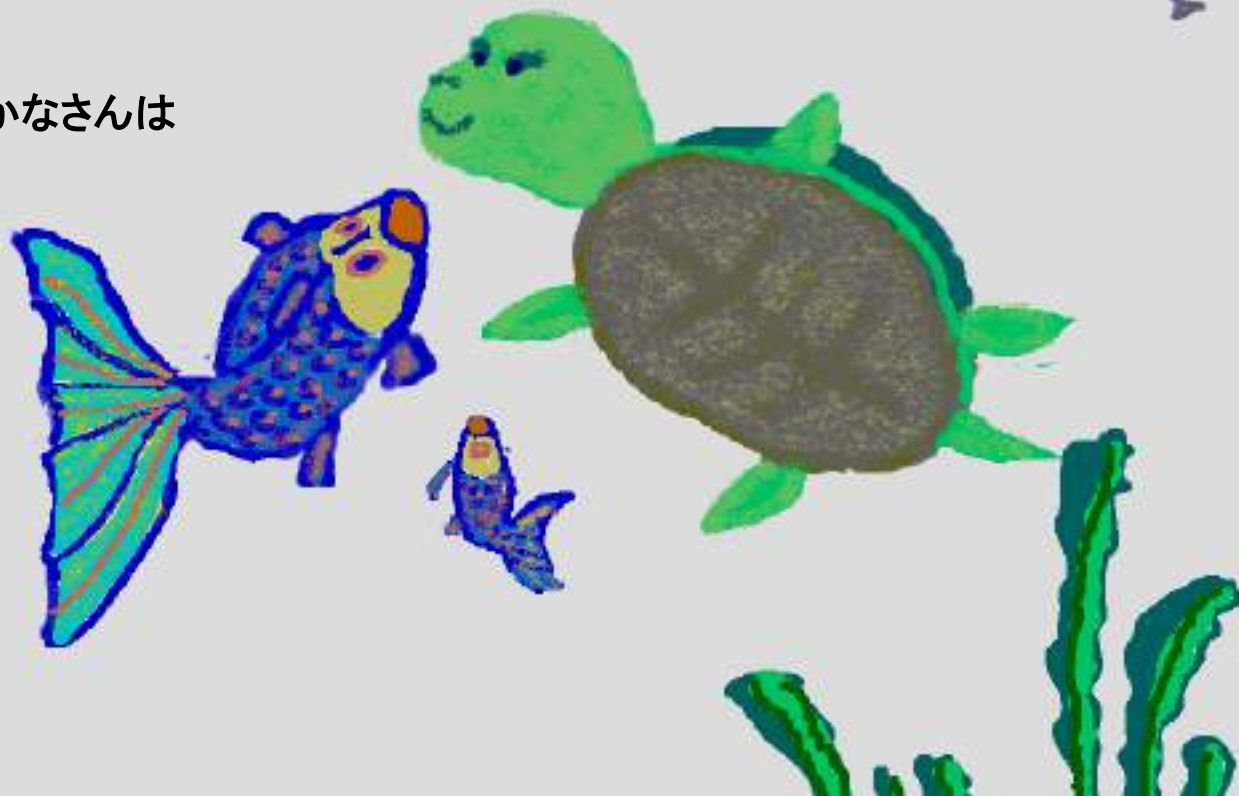
カメさんは 言います
「お魚は 泳ぐのが 早くて 捕まえられない のです」
「それに 魚さんは 一緒に 泳ぐ 友達だし…」

なんだか 悲しそう です

喜んでばかり鬼さんは、
「お魚さんは いりません」
「貝 や 昆布を お願いします」

かめさんが 辛くなることは 言うまい
と 思ったのです

だって カメさん と おさかなさんは
お友達 なのですから



カメさんは 何回も 海にもぐって
貝 と 昆布 を とり
喜んでばかり鬼さんに 渡しました

怒りんぼ鬼さんは
「僕は 魚が 食べたいの！」
「なんで 僕の気持ちを わからないの！」
と、怒りはじめました

「ふ～んだ」
「僕は 魚さん を手にするまでは
帰らないぞ～」
プンプンです。

「困ったなあ」と
喜んでばかり鬼さんは 思いました
しばらく 考え

「それでは お魚を 大事にしている
くまさんに 会いに 行きましょう」
と 言いました。



野原にある 大きな 川では
くまさんが おさかなを とって いました

山も 食べ物が 少ないので 生きていくために
くまさんは おさかなを いただいています

くまさんが おさかなを 水の中から すくいあげる時
おさかなさんは

「ありがとう 僕の命を つないでくれて」

と 涙を流しながら 言うのです

くまさんは
「僕の方こそ ありがとう」
「今年も 生きることが できます」
「あなたの命、
森の仲間にも 分けますね」
と おはなしを しています

おさかなさんは
卵を産むと
死んでしまうのです

それを 知っている おさかなさんは
自分の命を 森の仲間に 差し出すのです。

くまさんは、自分と 森の仲間の
命を つなぐために
おさかなを 探らせて もらうのです
おさかな と くまさんの 約束事です



怒りんぼ鬼さんに
くまさんは 言います

「おさかなを 川からすくって 分けて あげるね」
「そのかわり あなたは 命をくれる おさかなと
どんな お約束を しますか？」

怒りんぼ鬼さんは
びっくりです

だって そんなことを
考えたことが
なかった からです

怒りんぼ鬼さんは
怒ることだけが
自分のすること だと
思って いたからです



怒りんぼ鬼さんは

「俺は鬼だぞ～ 怒ってばかりだから 怖いぞ～う」

くまさん や おさかな の 前で 言いました

それしか 出来ることは なかったのです

おさかな と くまさんは びっくりして・・・悲しく
なりました

「いいですよ。そんなに 怒らなくても 私の命 あ
げますよ」と おさかな。

「そんなに 怒らなくても 命のおさかな 分けてあげ
ますよ」

と くまさん。

怒りんぼ鬼さんは 困りました

怖がっても くないし 怒っても くないし・・・

親切だし・・・

怒りんぼ鬼さんは

どうして 良いか わかりません

心の中は うろうろ です



くまさんが
怒りんぼ鬼さんに
言います

「好きなだけ いのちのおさかな 持って行って」
「でも 捨てちゃだめだよ。 おさかなさんが 悲しむから」

「怒ってばかりだけど 本当は やさしいよね」
「顔は 怖そうにするけど 本当は やさしいよね」
「あなたと 友達に なりたいなあ」

怒りんぼ鬼さんは
また びっくり です

「えっ。 怖くないの？」
「えっ。 こんな 僕でも・・・？」

怒ることで 元気を得てきた 鬼さんは
どうして よいか わかりません



とぼとぼ おさなかを 沢山 担いで
カメさんのいる 海へ 帰ってきました

なんだか 元気が 出ないのです
誰も 怒ってくれない からです
誰も 怖がってくれないからです

帰ってきた 鬼さんを見た カメさんは
「よかったね 大好きな おさかなが 手に入って」
「よかったね お父さん お母さんが
きっと 大喜びすると 思いますよ」
ポロリン ポロリン 泣きます

そして 言うのです
「おさかなの 命が
あなたや 山にいる お父さん おかあさんに
引き継がれるんですね。 よかったですね」
「おさかなさんも よろこびますよ」
ポロリン ポロリン



怒りんぼ鬼さんは 心が むずむず しました

「お父さん お母さん 喜んでくれるに 違いない」

むずむず

「僕が おさかなを 持って帰るのを
待っている 人がいる」

むずむず

すごく 気持ちのよい むずむず なのでした

むずむず

むずむず

怒りんぼ鬼さんは
「人に やさしく してみよう」
「怒ることを やめよう」
と 思いました

「あげるよ」
好きなだけ 貰って」
「僕 怒らないから」
「貰ってくれと 僕 うれしいんだ」
喜んでばかり鬼さんに 言いました

でも まだ
つけんどんな 声です

怒りんぼ鬼さんの 言葉に
喜んでばかり鬼さんは
うれし涙を たくさん 流しました
「ありがとう。
貴方の きもちが 素敵です」

怒りんぼ鬼さんは
また また
嬉しく なったのでした

「ややや。
気持ちが いいぞ」
「怒るよりも
こっちが いいぞ」

そうなのです 怒ってばかりより
喜びの方が よかった のです

それからと いうもの
怒りんぼ鬼さんは
怒らなく なりました

そして

みんなと 仲良く
末永く 暮らしました と さ



怒りんぼ鬼さん と 喜んでばかり鬼さん

- なんとなく、この様な物語を、つくってみました。
- 何歳になっても、上手く生きる事が出来ていない自分を見い出すことも事実です。
- そんなものなのでしょう。人間という生き物は。
- 居直りと、「こうありたい」という思いでしょうか。

2010年3月



ゆきのなかで
あそんじゃお

ドクトルJOJO
あばうとbook

あるき ながら
つらら おとして

かんかん
ぼとぼと

ふゆの ひび

あーこわい



あるき ながら

おおだま つくり
ゆきだるま



ずずずず

めりっめりっ

できたーあ

そら ながめ

てで おまんじゅう

ゆき がっせん

いくぞ～

ようし

いたっ



すこっぷで
おおきな おやま

かまくら つくり

うふふふ
うむむ

あつ
あな あいた



あっ ころんだ

みている じぶんも

すってん ころりん



つるつる
てかてか

おお～こわ～

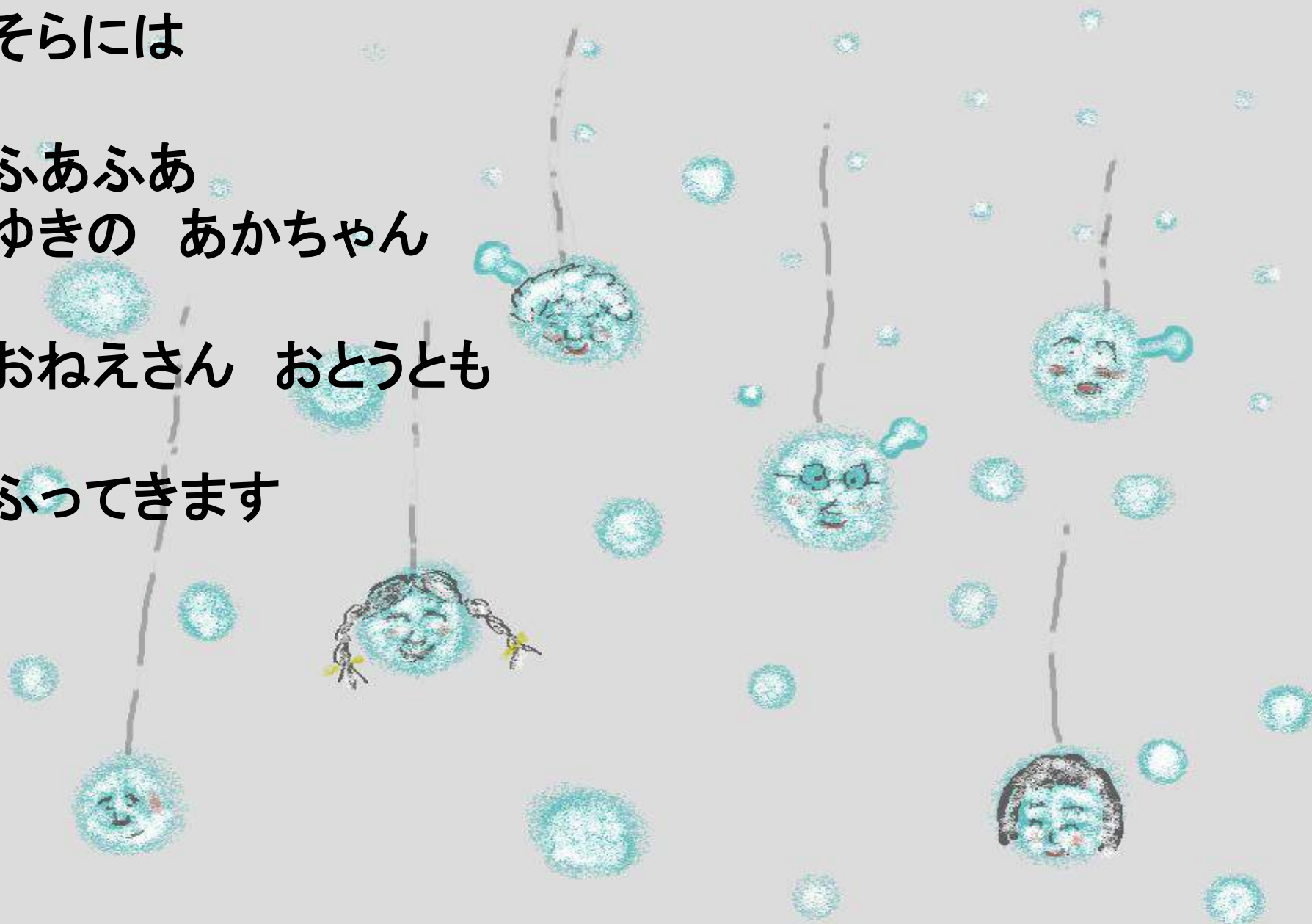
そらには

ふあふあ

ゆきの あかちゃん

おねえさん おとうとも

ふってきます



そらから ふってくる
ゆきを みてると

そらへ のぼるん です



ゆっくり ゆっくり

わあ～
すてき～



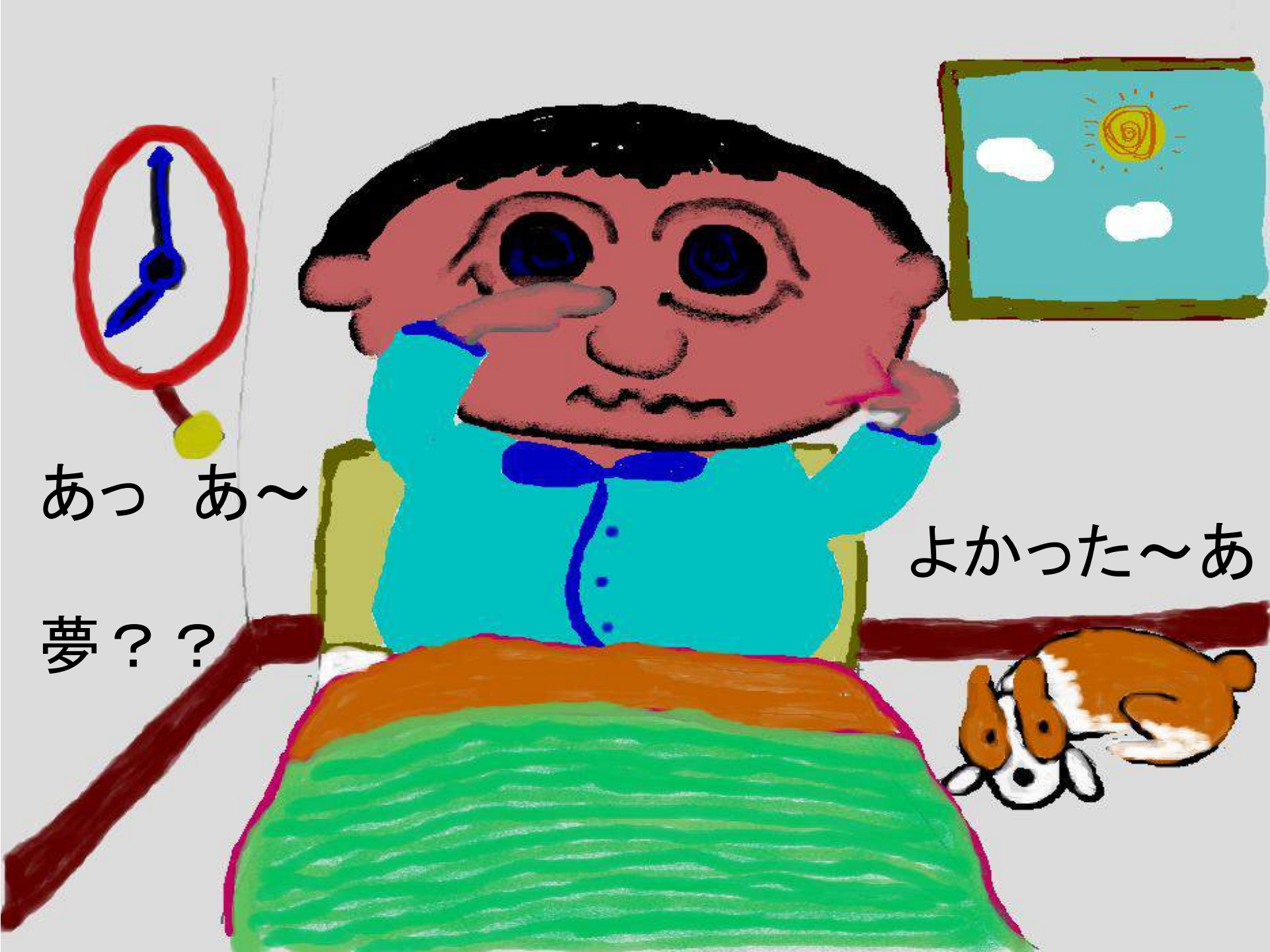
すこし こわい けど……

あっ われたあ～

こおりの うえ
すきーで わたる

すけーと で～す





あっ あ～

夢??

よかった～あ

ゆきのなかで あそんじゃお

- 幼少期は、新潟県高田市で育ちました。その頃は、雪の深い場所でした。
- 雪の中での生活は、心に刻まれています。
- 天気のよい日には、家族総出で、雪下ろしです。隣やご近所の人々とは、屋根の上で挨拶を交わし、励ましあっていました。
- そして、毎朝、朝早く起きて、雪踏みをしている母の姿。朝、玄関が雪で開かなくなっていたこと・・・。
- 「雪」は、小学生だった私に、喜びももたらしてくれました。

2010年 4月

電信柱の木の下で



ドクトルJOJO
あぼうとbook

よっちゃんといっしょに
のはらへ 行って
ちゃんばら ごっこ

ちゃん ちゃん
ばら ばら





みっちゃんと いっしょに
のはらへ 行って
かんけり ぼっこり

からん
ころん



おとうさんと いっしょに
いえの そとで
バトミントン

ばどん
みとん

ぱっーん
ぱっつん



こうえんでは
フラフープ

よーうし

ふーら
くるくる



おねえちゃんと いっしょに
かえり みち みち

グ リ コ チ ヨ コ レ イ ト パ イ ナ ツ プ ル

じゃんけん ぽんぽん
あいこで しょ しょ




A colorful illustration of a child taking a bath in a wooden tub. The tub is filled with blue water and bubbles. A child with dark hair is sitting in the tub, looking up. To the right of the tub is a grey stove with a chimney pipe. In the foreground, a dark red table holds a white plate with green corn cobs and a silver knife. A small brown dog is standing on a yellow mat, looking up at the table. The background features a window with a grid pattern and a wall with colorful squares.

あ～つかれた

おうちに はいって
おふろに どぼん

おやつは トウモロコシ

ゆうはんは
たまごかけ ごはん かな




きょうは おそとで
やまのぼり

んしょ んしょ

木登り
たかいぞ～

よつとよつと



きょうも のはらで
月光仮面

バギューン

おーとばい

ぶるるん
ブルッブルッ

おそとは ゆうぐれ
ゆうやけ です

ゆうやけぞらに
とんぼが みえます



「一番星 み~つけた~」

電信柱に 電気が つきます



あ～
おなかが すいた～

「ゆうごはんだよ～。かえって おいで～」

遠くから
お母さんの 声が 聞こえます

かえろっと



電信柱の木の下で

- 子どもの頃の思い出です。
- 古きよき時代は、誰にでもあるでしょう。
- 父母に見守られていた時代。おそらくぬくぬく感じっぱいだったと感じます。
- 忘れたくない記憶です。

僕たち マルチアンテナ人間

僕たち
マルチアンテナ人間

ドクトルJOJO



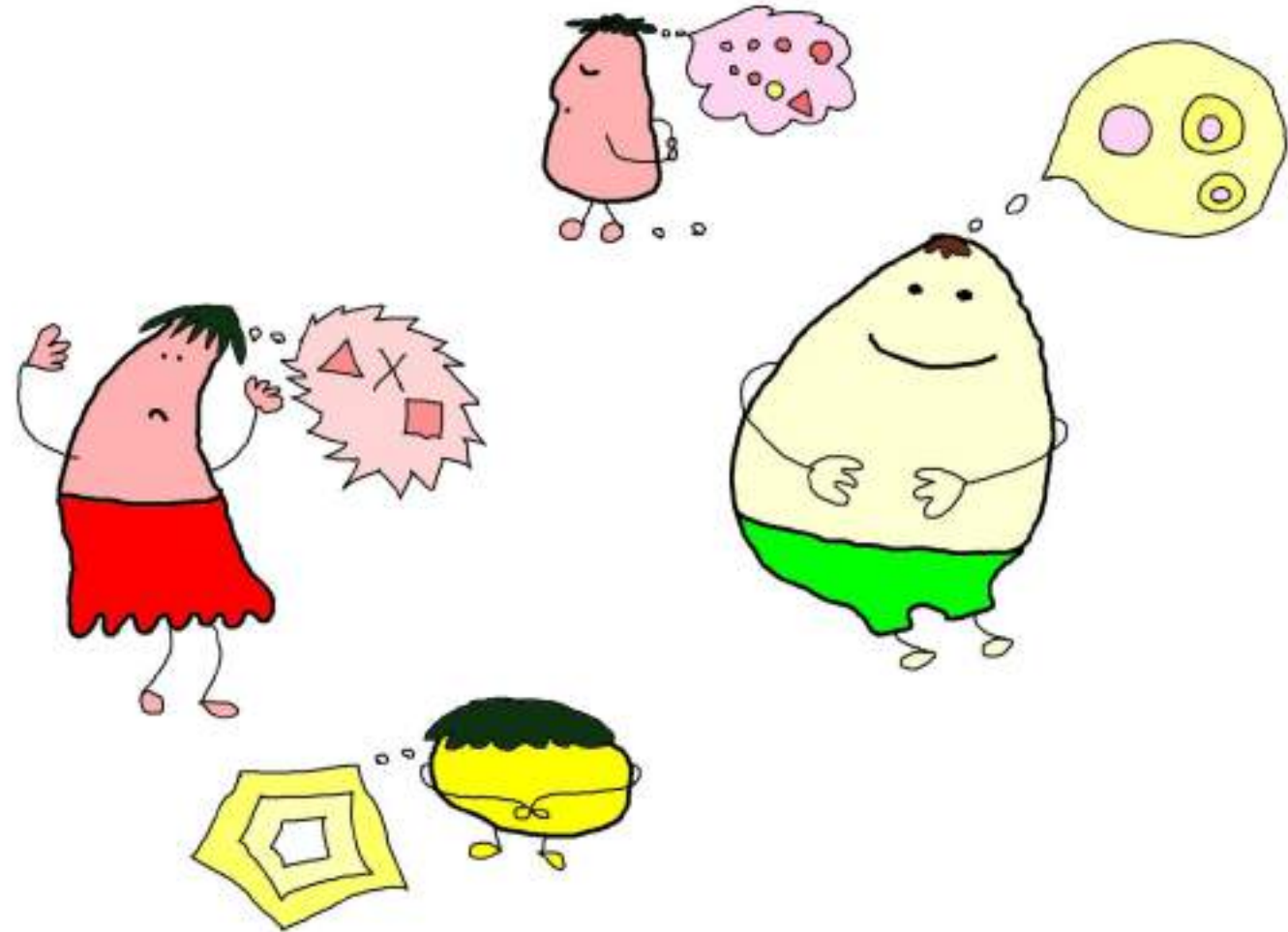
ドクトルJOJO
あばうとbook

人間って 面白いよね
一人ずつ 違うんだよ

何のこと？

一人ひとりが
違うことを
考えているんだよ
感じているんだよ

ふーん そうなんだ

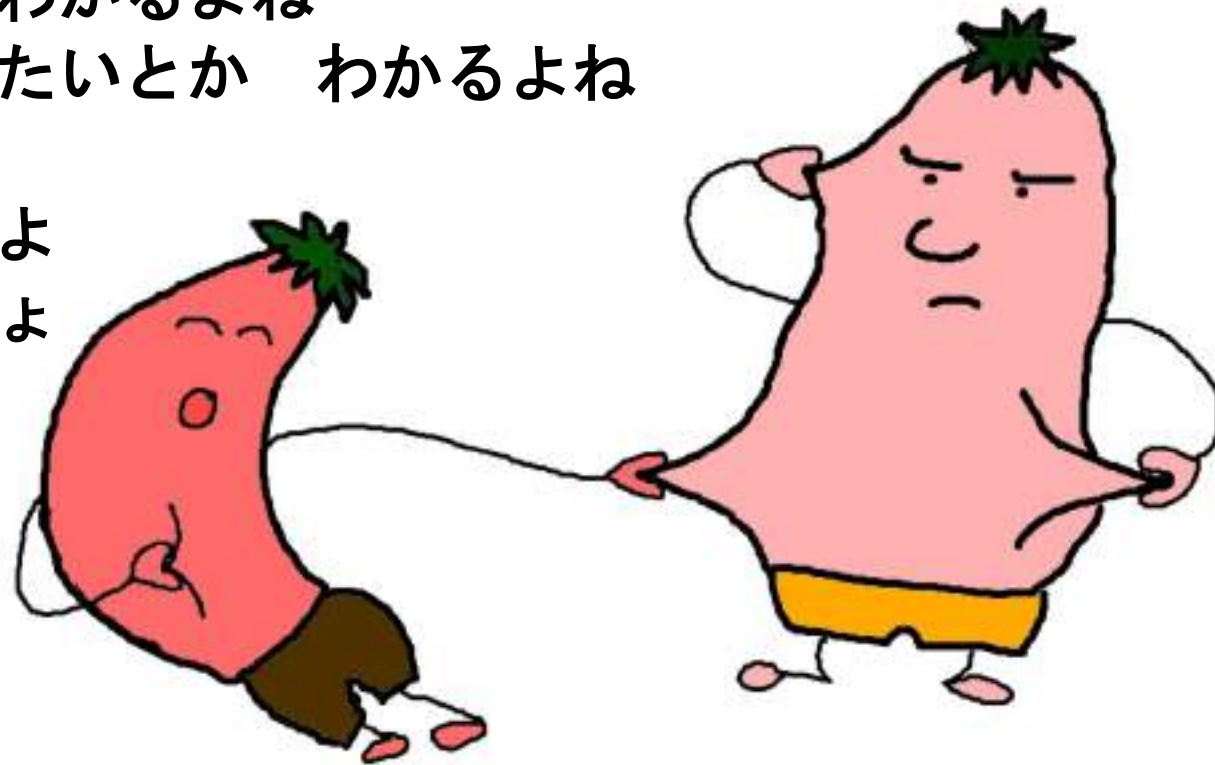


人間ってさ 皮膚に 包まれて いるんだ
外との境目が 皮膚 なんだよ

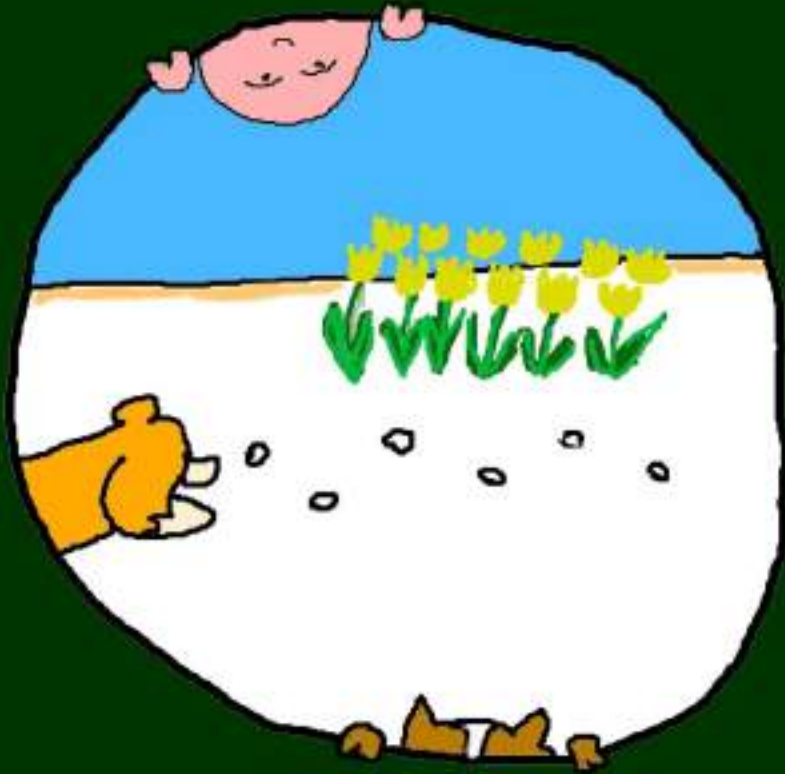
えっ そうなんだ !

何かが 触ると わかるよね
押されると わかるよね
熱いとか 冷たいとか わかるよね

これが皮膚だよ
すごい でしょ



でもさ 皮膚で囲まれている 人間は
触れてない外の世界を
どうやって 知ることができるの？ どうやって わかるの？



まず 目のアンテナ

目を手で隠すと 見えなくなるでしょこれが
目のアンテナ

目のアンテナが 取れちゃったら
ぱっと 真っ暗に なっちゃうよ
でこぼこ道で つまづいちゃう

周りに誰かいるの
わからなくなっちゃう



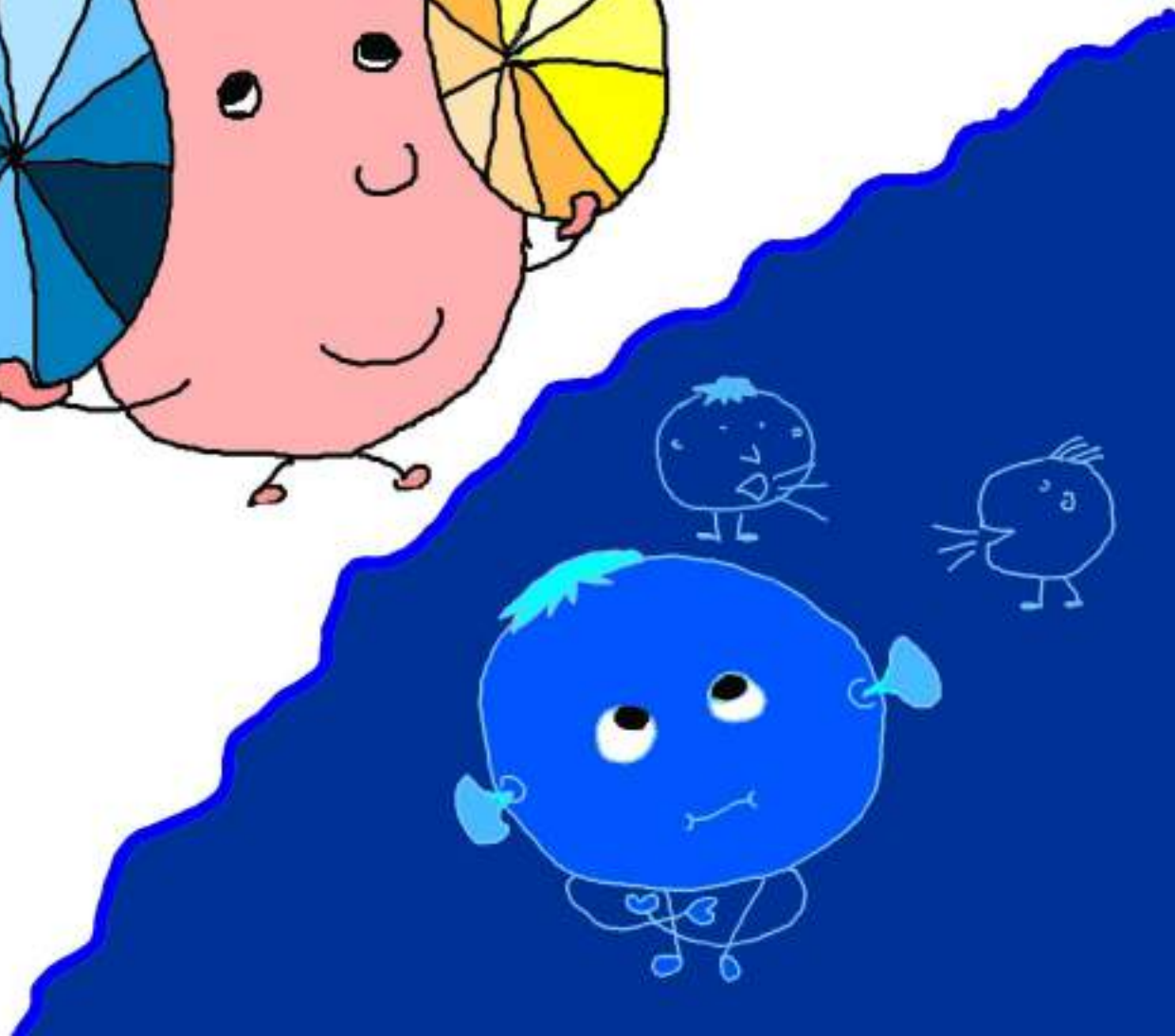
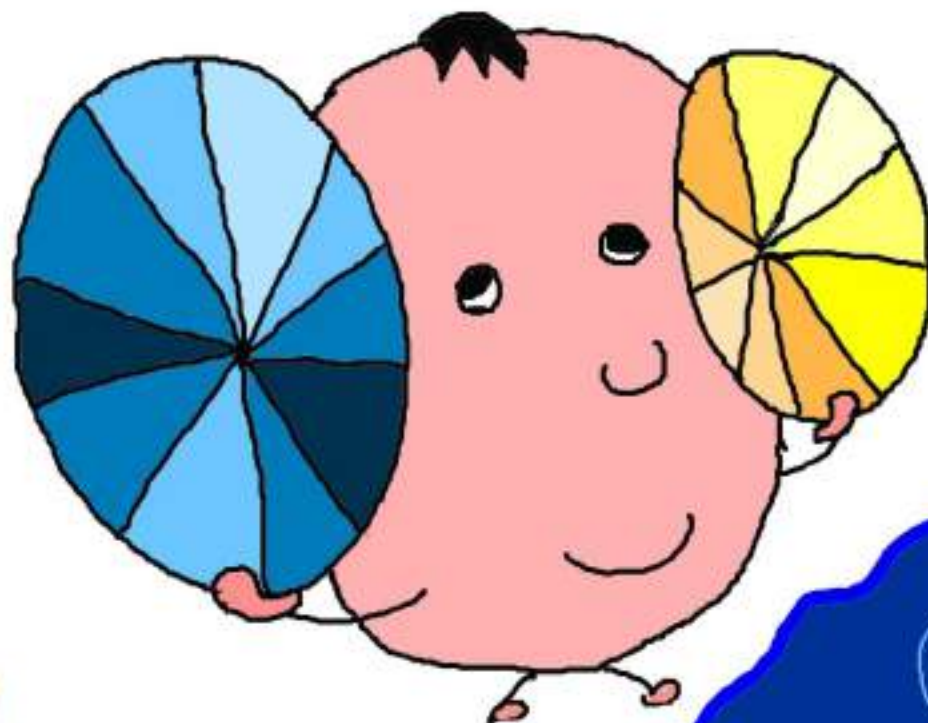
つぎに 耳のアンテナ

これがないと 音が
聞こえなくなるんだ

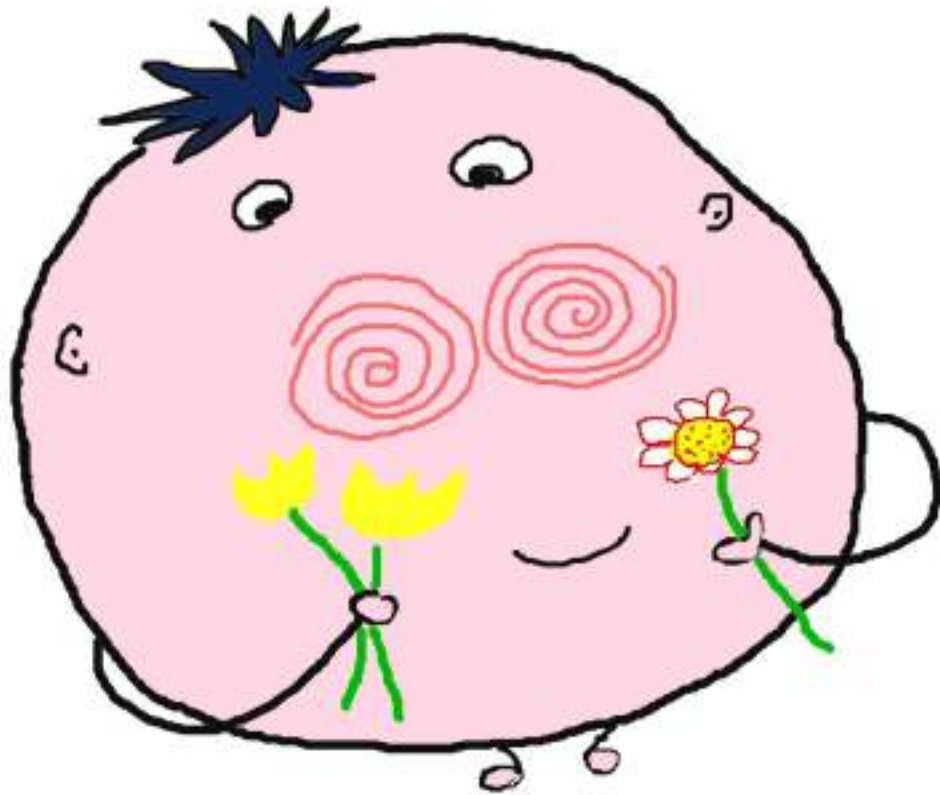
えっ そうなの!
大好きな
お母さんの声も
聞こえないのかなあ?

そうだね

耳のアンテナが 取れちゃったら
みんなのお話が 聞けないね
さみしいね

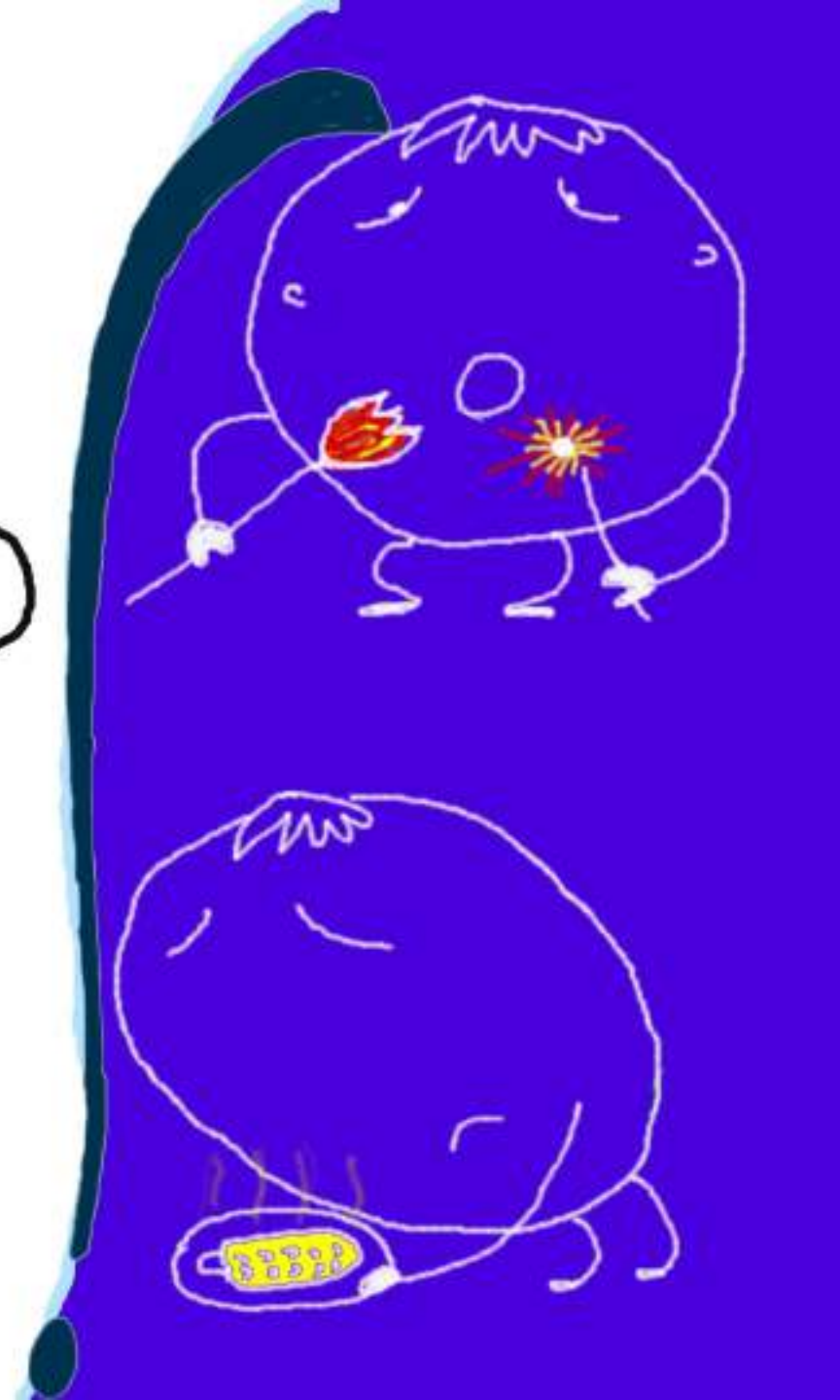


そして 鼻のアンテナ



これで いろんなものを 区別できるんだ
匂いって いうんだよ

鼻のアンテナが とれちゃったら
風の中の 金木犀の匂いが
わからなくなっちゃう 食べ物の匂いもね

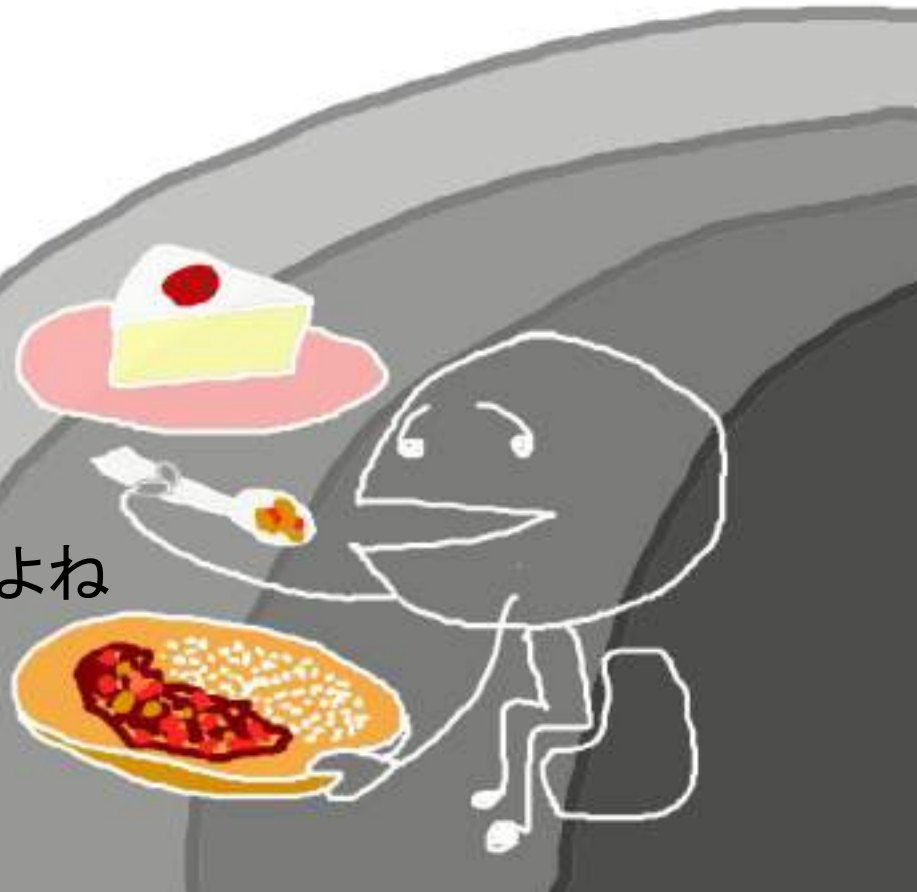




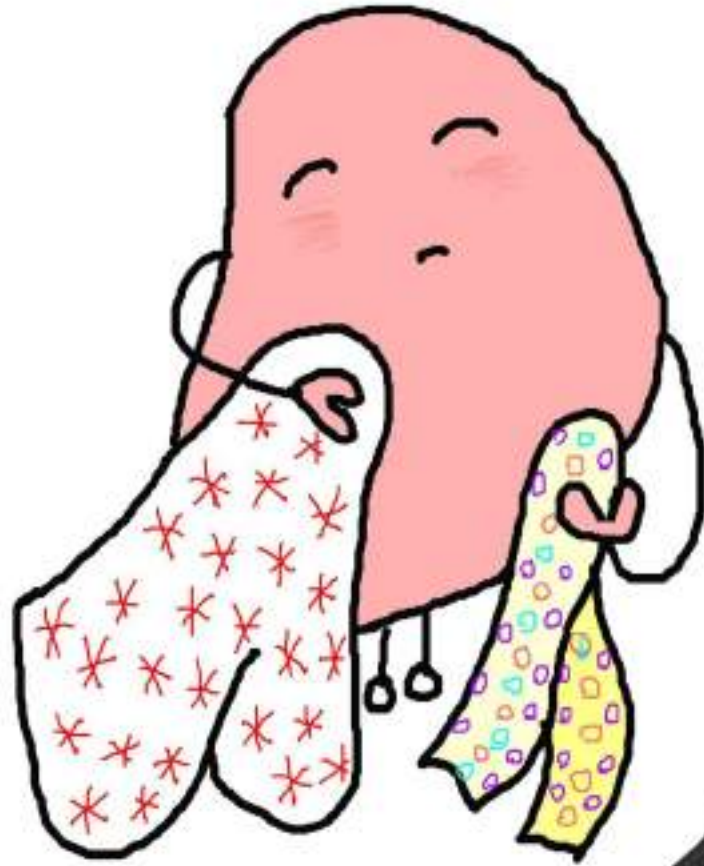
べろのアンテナ

これがあるとね 食べるのが
より 好きになるんだ
だって 味を感じると うれしいでしょ

べろのアンテナが とれちゃったら
ケーキの おいしいの わからないよね
カレーライスの おいしいのもね



最後に 皮膚かな



皮膚のアンテナが
とれちゃったら
あったかな 毛布
すべすべした マフラー
わかんない よね



みんな 取れちゃうと
どうなっちゃうの？



楽かな？ つまらないかな？ 不安に なっちゃう



みんな びんびんだと
どうなっちゃう のかな？

楽かな？
不安に なっちゃうのかな？





きっと
つらいよ

きっと
今が一番いいんだよ

僕たち マルチアンテナ人間

- 私たちの持っているシステムのことをこんな風にあ
らわしてみました。
- 面白いシステムを持っているんだよ、と言いたいの
です。
- 一人ひとりが違う存在でありながら、お互いが理解
しあうこともできるということは、面白くもあり素
晴らしくもありと感じるのです。
- その基礎に、こんなシステムがあるというお話です。

2010年5月初旬

とりあえず中締め . . .

- ここまで見て頂き、ありがとうございます。
- これらが、この様な形で日の目を見るとは、思っていませんでした。
- 「こんなことに人生の時間を費やした人がいるんだなあ」と思って頂くとして、それもきっと何かの縁でしょう。
- 何らかの思いが、心の中で灯っていたら、嬉しいです。

ドクトルJ O J Oとは、私のペンネームです。

あばうとbookとは、「大雑把な、いい加減な本」という意味を込めたものです。



姉の絵が混じっていたよ

小学校3年生のようだ

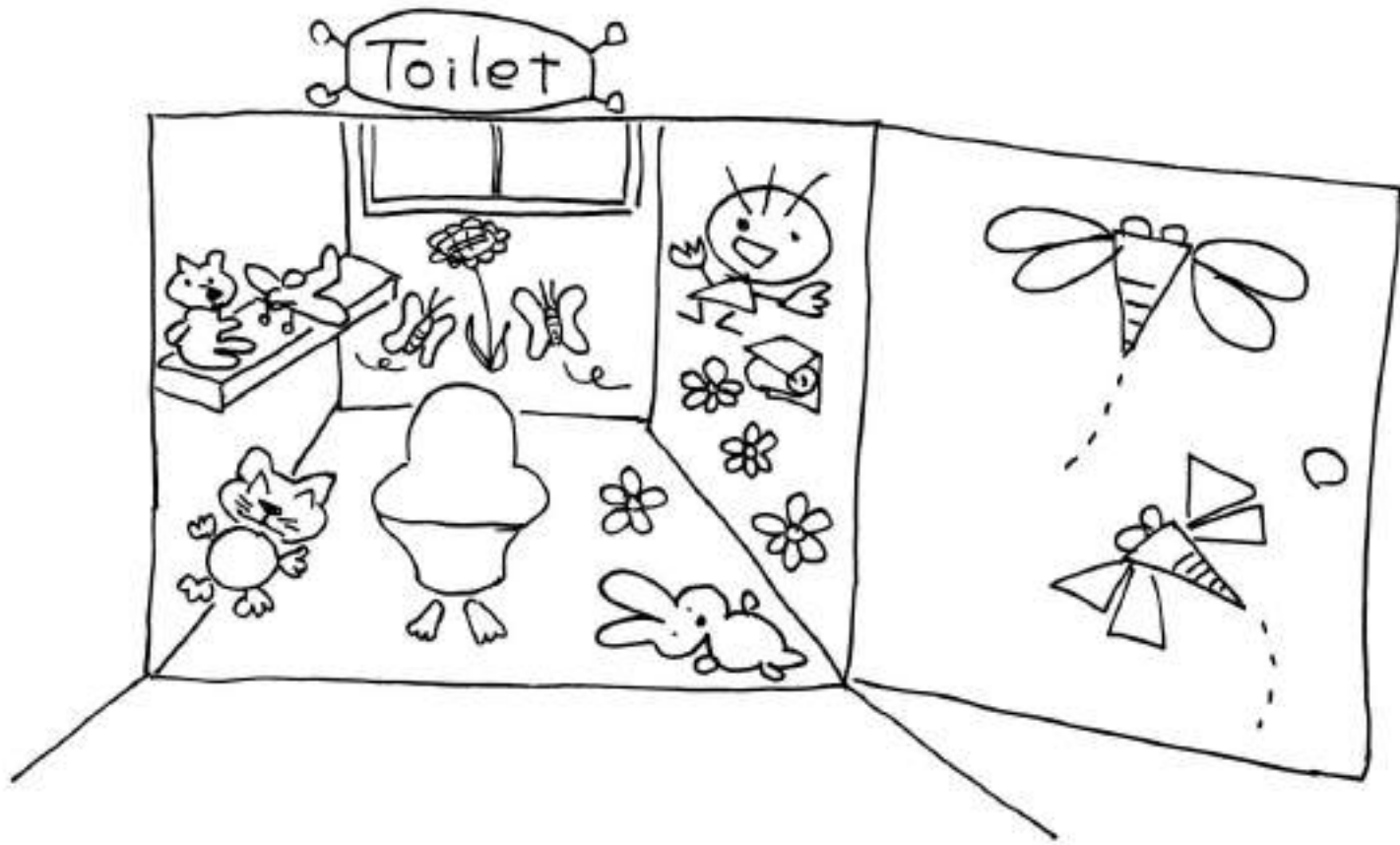
50歳代に絵本もどきを描いた そして60代後半に本作りでイラスト？漫画？ を描いた

- 以前の本作りでは、子供たちに絵を描いてもらった。
- その後、子供たちも忙しく、自分で描くしかなくなった。そこで、イラストの描き方の本を購入し、練習した。その分、独自性はなく、その分つまらないかもしれない。が、なかなかこんな風に描くこともなかったもので、それなりかもしれない。
- せっかくなので、ここに載せてみようと思った。なかなか、こんな風にまとめることはないから。

わんこは家の1代目のわんこ楽俊ーコーギー犬がモデル



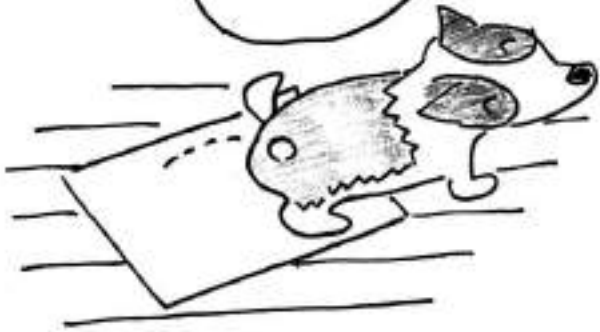
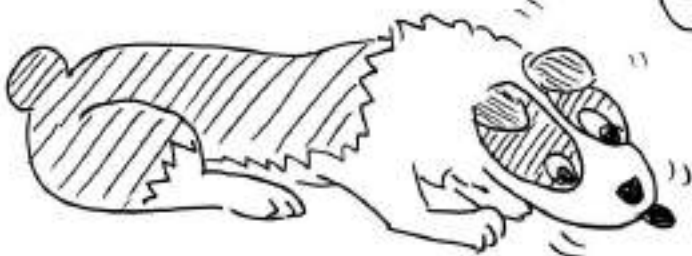
こんなトイレがあれば、子供たちは怖がらず、嫌がらず、楽しいかも



ヨシ・コナン



ヨシ



子供の笑い顔ほど 嬉しくなるものはない



このお釈迦様の絵はそれなりに気に入っている

孫悟空はうまく描けなかったが



優しそうでしょ



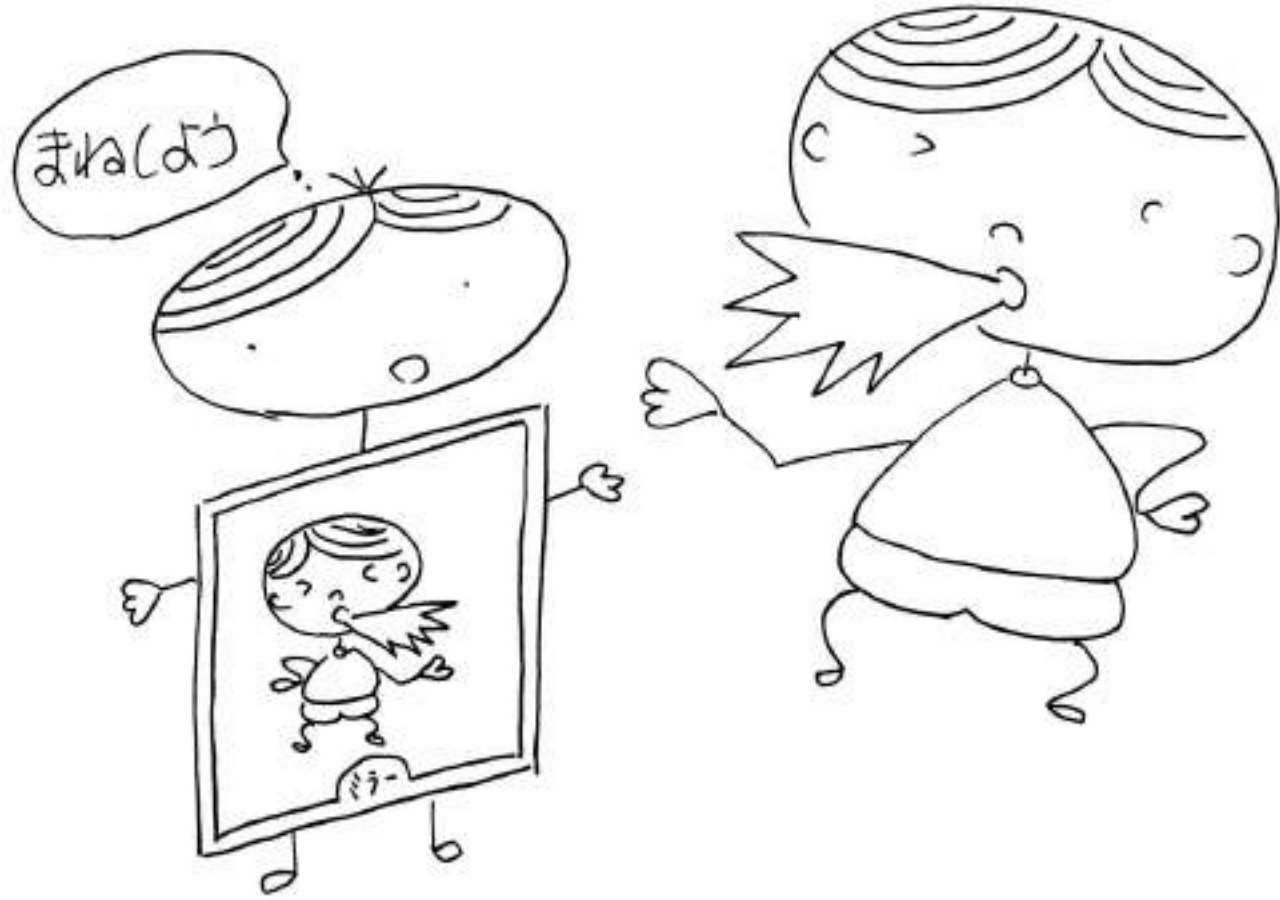
人は画像に弱いですよ
私も・・・そして想像性を
奪われるかも・・・





左のイラストは
気に入っています





長をつけよう!
暗い夜道と四角い窓



一家訓
注目行動には
注目しない!

こっち
向いて!



ツツツツ



これで
いいのだ

こまたな

なぜ

えっ

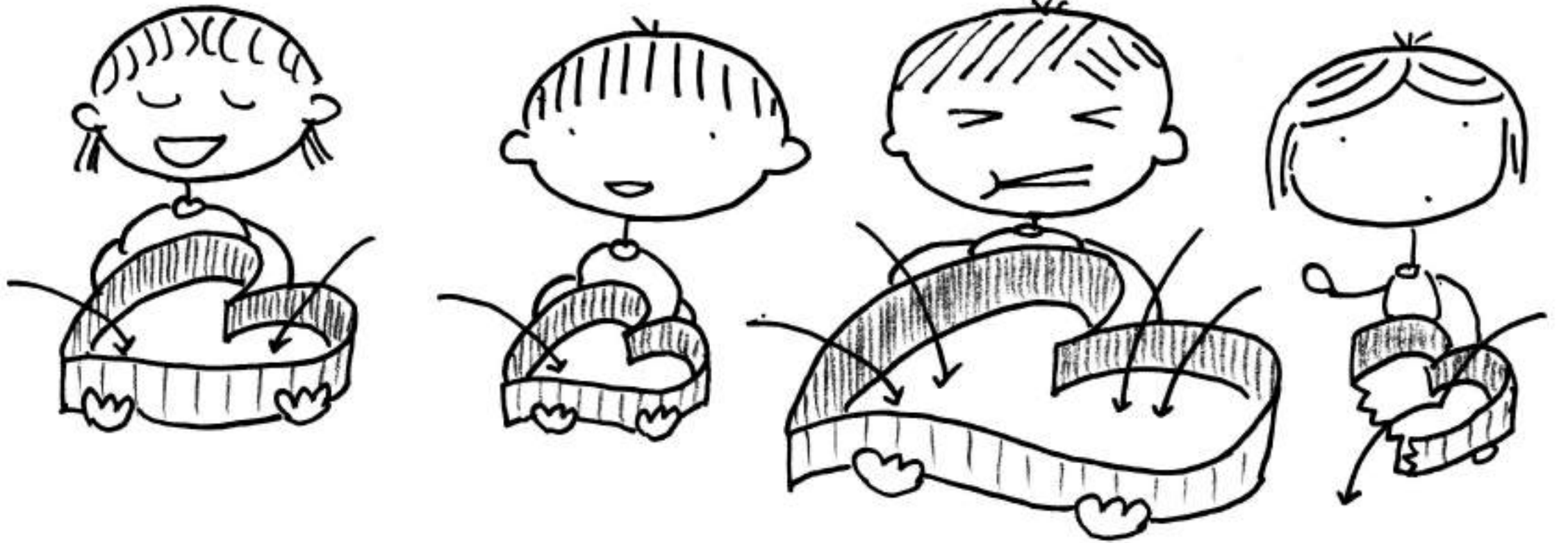


ヤダ
ヤダ

バカ
バカ



人はそれぞれだよ



愛を受けとる器の大きさは
人それぞれ

60歳の時の年賀状の絵



製作 造形 彫刻？ 何でもあり

作ってみると・・・

60歳頃



20歳頃





小学校後半で作成した船
設計図はこどもの科学にあった

紙で作り、色を塗り、ニスをかけて防水
池で浮かべ、電池とモーターで外輪をまわすと、
前に進んだ

60年近く前に作ったものなので、よく壊れないで
保存されてきたね







トーテムポール
1本の木を削り、色を
付け、ニスを塗り
台はかまぼこの板



それなりに迫力が



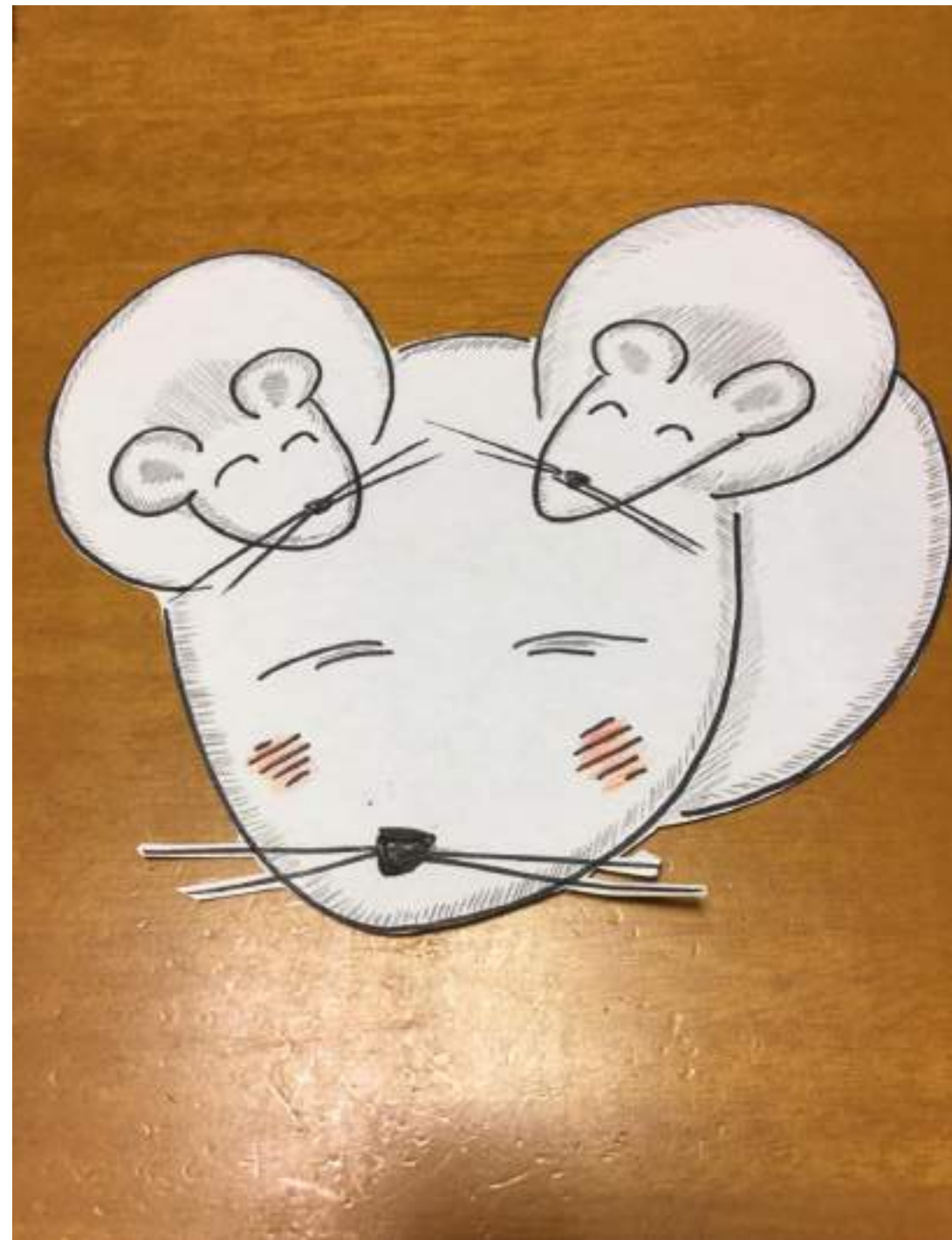
こんなの
よく作ったなあ
ちょっと不気味かも

13年一緒だった楽俊が居なくなり1年 さみしいので製作 2019年
針金で骨格を作り、その上にギプス用包帯をぐるぐる
そして ティッシュペーパーでふくらみを作り、その上からぐるぐる
そして色付け



本濃さんの
段ボール彫刻を見て
発奮

2020年年賀状用 ネズミのアイデア



5年前に青陵大学の
市民講座で作った



コーギー犬
楽俊がモデル

アイデアはよかったが釉薬を使っでの焼きは
上手くいかず失敗 次回は素焼きで彩色しよう



コーギー犬
楽俊がモデル

とっしょうめぐむ ベストコレクション

- 自分なりにいいなあと思う絵を再度
- クレヨンで描いた絵が一番いいなあ



右に自宅
左にアパート
真ん中は庭の冬囲い

絵の出来はよいかな

これは描いた時を覚えている気がする

言えには雪対策の横板がはめてある

大根が干してある



暗い絵かも知れ
ないけれど

中学の時



両親を描いた
おそらくこれで 力尽きた いや
出し切ったようだ

あと まともな油絵はない

子供たちはこの絵が怖かった
らしい

本人はゴッホを若干意識したかも

本当はルノワールのように描きた
かったけれど・・・



神社の狛犬

かわいいなあ

背景の色が
素晴らしい



これは確か高田の旧市役所
木造の建物で、素敵だった
本町にあった

こういう絵がいいなあ



賢げで
その分？

達磨ストーブだよ

冬だね



明確な色合いだね

なんか
いいんだけど



幼少期の
なつかしき
風景



懐かしき
大手町
小学校



高田の町の雁木通り
だろう

カラフルだ

遠近法も使っている

色使いも素敵



コンクリート作業
現場

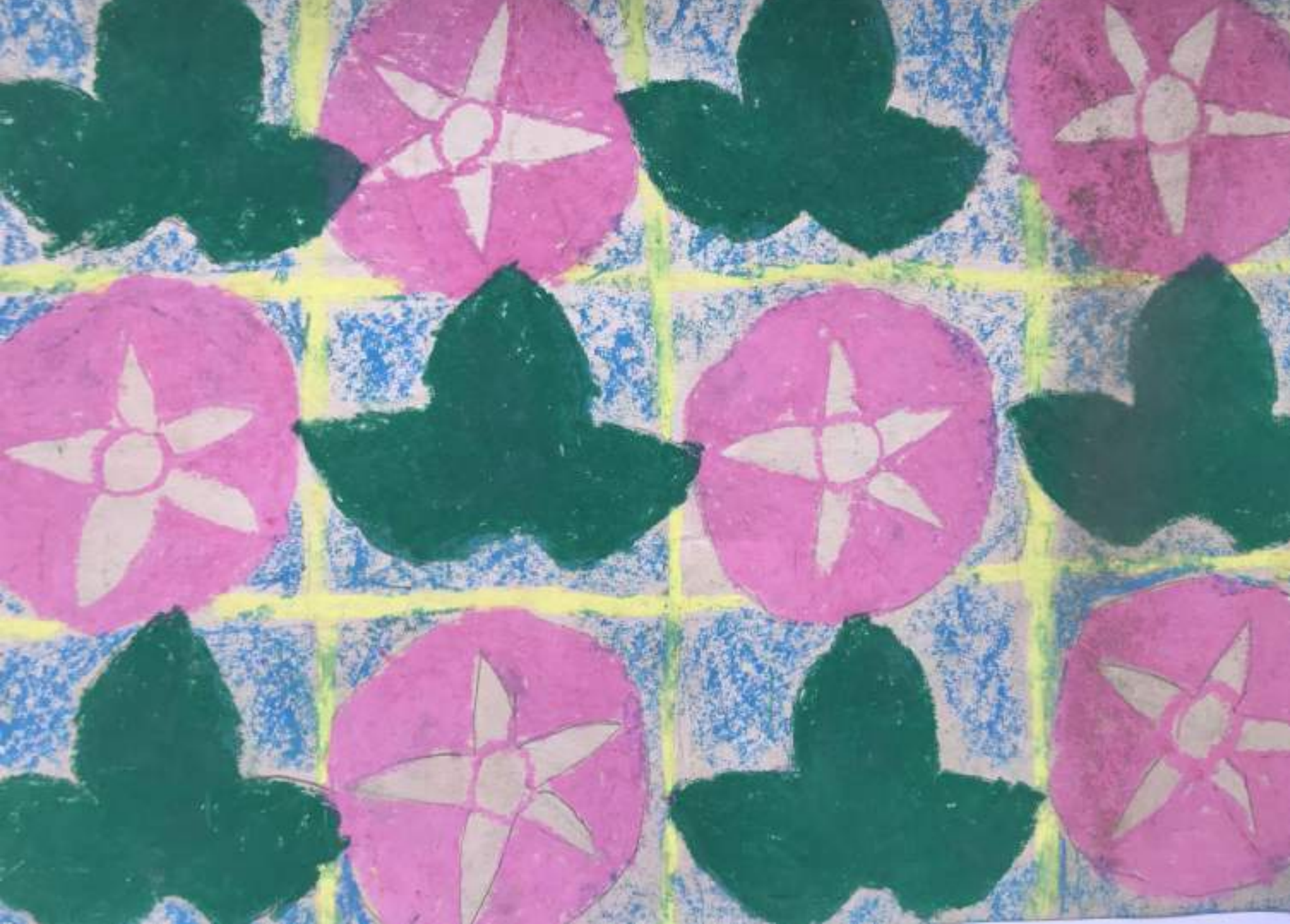
顔の描き方はやっぱり
子供だなあ

でもきっちり
性格が出ている？



妙高
冬景色

重なり合いがすごい



デザインだ



龍という字をか
いているので、
年齢は高いとき
かも。



印象派
の絵
みたい

屋根の色が
素敵

テーマ別にまとめてみました

母の鏡台シリーズ



母の鏡台
シリーズ

自画像シリーズ







4年生
10歳

動きと表情があるね
昔はこんなセーターだった
9歳10か月の絵

父母シリーズ



7歳



1～2年生？

たらいに
洗濯板

昔の婦人の
定番

白い割烹着



家の台所
右の釜はご飯用？

白い割烹着は
主婦の定番姿

下は着物かも



確か物心ついた頃の
家の台所はこんなだった？

右にはガス台が・・・

上にはネズミが・・・

1～2年生？



版画の原板

刷ってみると・・・

小学校後半？



2年生



父か？
母の大きな顔の
絵がないなあ

1～2年生？

2年生

うだ



ベレー帽をかぶった父



作ってみると・・・
父と母の特徴はよくとらえているとわれながら思う

50歳頃



20歳頃



家シリーズ



新井市川上の
実家ないしは親戚
での餅つき？

7歳

節分
鬼は外
福は内

2年生？





家の右側から
玄関、ふろば、台所

これは家の北面から
見た構図



家のふろ場
ふろおけは木でできていた

湯上りは右側で
煙突が水の中を
通っていた

1～2年生？

ここから木製の柄杓でお湯をすくって
顔を洗ったり・・・

1～2年生？

確か物心ついた頃の
家の台所はこんなだった？

右にはガス台が・・・

上にはネズミが・・・





家の台所
右の釜はご飯用？

白い割烹着は
主婦の定番姿

下は着物かも



右に自宅 冬支度
左に県営アパート
真ん中は庭の冬囲い

絵の出来はよいかな

これは描いた時を覚えている気がする

家には雪対策の横板がはめてある 雪がこい

大根が干してある
たくわんができる

2年生
もっと上？



父が紙で手作りした大きな
ピンクのこいのぼりは
鯛みたいだった。

7歳

でも空を泳いでいたな。
紙なので、バサバサと
音がしていた。



左は自宅
間に道があり
右は田村商店

なんでもあった

電話も借りた

月光仮面のテレビ
も見せても
らった

昭和だね

高田公園シリーズ

- 蓮の花の絵がないなあ
- 描いたような気が . . .

7歳

高田公園？



とうぼうめぐむ



高田公園の猿

いたなあ



どうぶつえん



高田公園？

フクロウはいた？

トラは2頭、
ツキノワグマ、
クジャク2羽、
鹿、狸もいた。



高田公園の銅像だろう

なんとなく描いていた時
を覚えているような

地面がいいなあ

学校シリーズ





1～2年生？

教室にテレビが
来たことは覚えて
いるが・・

小学校のいつ？



1~2年生?

運動会

玉入れ





大手町小学校の
校舎だろう

ピストという雑種の
犬がいた

学校で飼ってた？



黒の輪郭を書いて

後で薄い水彩で
色付けをする

花火シリーズ

7歳

花火ですね

屋根に上って花火を見たことはないと思うので、願望でしょうか？







- 本コレクションは、母の功績だろう。捨てられるはずのものを取っておいてくれたからである。
- どんな思いだったのだろうか？

感謝